軍用記

中

14
2478
96(2)

門 イ 4
略 2478
巻 96(2)

軍用記 第三

目録

鎧威毛大熹 六ヶ条
草威之部
緋威
薑草威
洗草威
小櫻威
藍公地黄返
赤草黄糸
鎧威毛定法 九ヶ条
黒草威
赤草威
節縄目
小梅黄返
呂草威

綾威之部

唐綾威

練絛威之部

練絛威

糸威之部

紅梅威

白糸威

赤糸威

紫糸威

藤威

黃糸威

黑糸威

萠木糸威

紺糸威

黃櫨威

褐色威

卯花威

樫鳥威

色〻威

紅裳濃

紺裳濃付碧色裳濃之事

妻白

肩白

腰取

大荒目之部

糸緋威

澤瀉威

鋪目威

紫裳濃

耳裳濃

黃櫨匂

肩匂付碧匂

妻取

大荒目
金交大荒目
鉄胴之部
鉄胴 加〻胴
相生相剋鎧
菱縫板
離物
着衣
仲縅緋威之歌
腰巻 并圖
三枚草大荒目
一枚交大荒目
包胴
四姓鎧
威絹
縫迫
具足
昔具足当世具足
胴丸 并圖
当世具足号
腰当
袖験
具足之寸
鎧着吉方
御曹司役人
馬喇其外凶非〻咒禁
大将之御鎧を着
武具〻字用
鉄胴圖
鉄鉢
笠印
鎧ヲと云詞
御鎧石次才
冑為召様
人〻鎧を見
甲冑之字訓

軍用記　第三

鎧威毛の大意

一　威毛と云ふは威敵乃目を却すと云也毛と云事ハ札を綴たる糸のあらびつゝなりこゝろが毛をあらこゝるゆゑ毛とハいふ毛引と云も同しく公ゝ草威綾威の類も同例之

一　鎧乃威毛乃色目ハ一條院御代の書に見者り　保元乃物語より以来代々の軍物語ふるし此威毛の名見えこゝり

一　楠正成ゝ金剛山の城に壁書に甲冑ハ札よりきを用ふる毛を好むへしすなハ一ちゃうげも札者不かゝゝハ合戦の用ハ疑ふ

今鏡に云書云
ものゝふのかけの羊ゝひ
ゆゝしゝとゝ云
見くゝう
一條院御代
ゝとゝ者し
たる書ふ之
ゆゝう

べし威毛を好むも甲斐の国の人は殺生を戒め田夫野人もよく
衣服着るハ少ハ人々も見聞てく弱武者も鎧の威毛
小かゝり袖て武者ありさまにはらげふ色べしまて強武者
のようなるふ如ようハいかゝ様ようもなきすもなし
色しかるとも歌の服をおどし事をうれ我身威をなす
今の法あるゆれ後おどしけ黒ハふ色一定ゝ言葉のよう
とりべかす楠が紺ハ札ようを多くすを書く威毛の
かゝりのようを好むを いつもようる紺あり

一 鎧の威毛のようなるを着られハ歌を付られるを
ようふ法あるもようなるを公や歌ふあつられる民者ようと

目をふ袖ゝようをんようて武士の面目多へれ歌ふ法
袖ゝハようをおそ袖ゝ戦場へ公ずゝ宿ようを居
て夜具多ようなるを枕ようをかゝ人ようそあるけ多
ようあつようもようを腰ふ節武士ようべ少を

一 威毛の事を柳ふ多ハ古の天皇或ハ一大将
行ようを鎧ふ威ふ色日方の戦ふ勝多ようを始多べ
其由事を委ゝのべたる流ようもの多ようき ふ書ハ
曽て見えさるようて形作者たる偽の説を用べるを

一 此行ようを威ハ札の形を母の形ふ作り母を ゝ母行を糸
ようおどしゆを車糸を引べし多べ札の形札の色糸の

耳糸等を磨(ハリアゲ)なぐしげの名を云ふ説多〻然れ
ども八曽て為きるなく皆私の作意多れ論説一変せざるべし

鎧威毛の定法

一札の形八刺ふ札を本式とする也様〻異形〻すれ八異例也
一札乃色八黒漆ぬるを是本式定式(ここ)なり金箔ぬる也
也此外銀箔朱漆青漆其外の色〻皆略也
一札の組様八毛引にて色を定る古の定式也大荒目八格子物也
一威毛の名目八糸威なれ八札糸の色バかりを以て名付る也
草威八草の色後威八後の色を以て名付る也札八黒漆にて
金箔ぬる也威毛の名八札の色形に如ふる事なり

二色の糸ニテラドスヲ二色ト云テ二デルト云ハ似タバイム人アリワレモ啄木ノ耳イトミノ二色ハナラヌナリ

一鎧の耳糸を白の糸にて云耳糸八啄木の組ヲ本式とする也多
色の糸を畧儀也耳糸に啄木の糸を用ふる八先祖の鎧を子
孫に伝へて着する其人の性に合八ぬるの鎧なれ啄木(ツツキ)也
其性に合八ぬるを乱す意なり啄木八多〻の糸を組文多物
なれ色八白色(何)なれ共つゝぬるを以て性に合八ぬるをこゝろ道理也
一鎧の胴の前八一面に深草にて包むれを弦走と云也此弦
色の草八白色(何)なれ共あれ威毛の名目ハかゝる也也近代の
鎧に八法色も多く腐蝕なり古の鎧ト八替りたりを代の鎧も
太の鎧に准して威すべし
曽の眉庇吹返鎧ノ袖冠ノ板左右ノ草摺ノカウモリ其等草ノ色八何色ニテモ威毛ニカハラズ
一威毛の名八専袖と草摺トあれ共其流八胴の前八弦走(走)の草

あるを色むらに見えずうしろ後の方ハ毋羅衣を掛るハ見えず
能くえまる前ハ唯袖ト草摺也佐々古人威毛の名を分
たるハ専袖と草摺とに有り胴の色ハ地色と通ず也地色トハ
たとへハ紅をそめたる色ハ胴をバ染す紅の一色ばかりする也
其外の威毛も押しなべてかるべし

一 鎧の弓組桐引の緒あざまきの緒脇楯ハ緒袖のみのみの緒
等の色ハ何色にてもあるべし威毛の名目ハ如くしるす也

緒

一 胄ハ威毛ハ鎧と同色なるを用ゐ毛のかはりとゝ云也別色なる
を用ゐるもあるのゆゑ胄の緒の色も威毛の名よりかりぬる也
右九ヶ条ハ威毛の定法也 正伝也是ゝ遠ざかる流々多

弟ガリ袖等ノヒレヌイノ糸ノ色モ威毛ノ名目ニヤハラス

説

正鎧まあるゝ左ゝ元す前の威毛の下ゝ皆右九ヶ条
乃熟をなるべ考べし

所

草威之部

一 上古の鎧ハ皆草を以て縫也 然也ハ草威を本とし後に漆
を威 絞威ハ出来しも也草威ハ漆なるかゝ紙細く裁
て両端を裏の右へ折り式を不折して糸威の如くかゝる也かゝ
とハ為めに草の表をえんなるけばりなるもつくるなり
草を云也ある草玉草 ふなぐ草なるの類也

ふな

一 緋威ハ緋色なる漆なる草なるかゝる也 緋ハ紅花なる漆る也其
色火のなるえ如くなる 火威なも書く也 浪威なる草威

や

本文糸の緋威を八糸の字を付て糸緋威と云也 紅威と云
名緋威と事也

一 黒草威と云八 黒草 ゆゑ威したる也

一 物ゑび草威と云八 物ゑび草を威したる也

一 赤草威と云八 赤草にて威也 赤草八 茜にて染たる草也
緋の草ヨリハ色ノ深き有り

一 洗草威八 洗草も威ス也 洗草八 薄紅に染たる草也是
を洗草と云ふ 緋色の草をあらひ去て色うすく
なりたるゆゑ洗草と云名 なるべし 実にあらひたるハ
あらず也 あらひ草八 茜を入て草のうらに成てふあらひたる草
也と云り 然あらず洗草 赤草 人の作為 たる説也

源平盛衰記ノ
印板本此奈
草威ヲ紫草
威ト書タル非
也紫ノ字ハ此
奈ノ二字ヲ誤
字タル也

一 品草威又此奈草威とも書也 品草八藍地に白ヲ斑染の
葉を二枚向ひ合本の方をおちうへを形九ノ両方ヨリ白ひ
合セたる紋をあげく染たる草也 依文斑角草ト云也 支那草
紫名草ト書 四名草
流ハ用べ云 志ゝ草ト書 志ゝ草とハ いひゝさ成
志ゝ草と云也 たトハ立音相通する成也 志ゝ草ト云
何ト付て品の字を俗り用ひ又此奈トモ書也

盛衰記ニ云紫草威ト八藍草ニ紅ジヲソ付タリケルト云ヘ

少後の書
ゑ草の名

草を右の少後を書て返したるゆゑ染かへたる草を威
たるを云也 赤威ゆゑ 草威ぞ也

藍白地草名

藍白地ヲ書て返
シタル草ノ名

ちゐ草の畫

ちゐ一名うゐ ちゐも云 青の流に用ゐる也

一 赤草黄糸の縫と云ハ 赤草と黄糸を以て 縫ひ毎
色を透く又ハ上てとして色を透く〳〵 威ひたる也糸
と草とを以て おどりたる 赤草 黄いと地に限べかりて
何色にもちゐ也

一 紫草威 藍草威 物を染草威 黒草威 白ゐ草威 黒草威白ゐハ各その威
たる草を以て威毛の名をとる所なり 細なり 多く
ちゐすゝ及ぶ

右の物 縄目小桜 品草糸のおどり毛ハ皆草威也 物を

おどり時絞の金物にかけらるゝ也

一 節縄目威ハ 据縄目据索目 伏縄目と色書 ふしゐ ふしゐと云 深草を威す
也物 ちゐと云草ハ白ト 青ト 糸の筋をなら折りに
染たる草也 其草を 竪小 細く裁 ニハ おのつゝ 摹の縄
乃ゆく ひまもの 縄の様 〳〵 用る也 されど 縄目と云也
糸威ハふしゐ ちゐと云 威毛ハふしゐ 草威に限たる名也

ふしゐ
の草の事

威之時ハモヤウ乱レ又ヤウニ草ト並ベテヌドスナリ

三之のちゐ
ちゐ
曲れる也

一 小櫻草威又畧して小桜威 小桜草威 小桜草と云草有
て威之也 小櫻草ハ藍地に白く小き桜の花形を染 たる

草色糸威ニハ小櫻威ト云フ威毛ハ多キ也草威ヨリ也

小桜草の事
威ス時桜ノ紋ノ
合ヲヤウニヨドヲ也

一小桜ヲ黄ニ返シ云フ鎧ト云ハ小桜草ヲ萌木地ニ小桜
ノ形ヲ黄ニ染タル糸ヲ以テ威タル也黄ニ返ト云ハ右
ノ藍地白紋ノ小桜草ヲ黄ニ深ク染タル也右ノ如クそめ
返ヲ地ニおのづから萌木色ニ成リ桜ハ黄ニ成ル也是外糸
威ニハ此名多シ草威ニ成ル也

一藍白地ヲ黄ニ返シタル鎧ト云ハ上ヘ藍紋ある

近世知ラぬ人ハ糸威の名也ト思ひあやまりたるのミなら
ず糸威ヲ新作シテ其名ヲ合ラんと
してさまざまこうらく物たる偽流多シ沙ゾ
かゝず有ラ記ス所の草の名ハ多キ鎧の威毛ヲ
て志ル者也 私の偽作ニハあらず

綾威之部

一唐綾威と云ハ唐土より渡りたる綾を細く裁て重子
て糸威しゝ威ス色也色ハ濃あゐ也色の加へたるや
うゞゝと云色ゝ前黄の加へあるを始ゝたゝゝそおどゝたる鎧
ゝゝ旧記ハ也ハ元ゝゝり糸威ハ加へあや威と云名ハか
き也これハ古色たるゝゝるれども紀得遠あるハ記置也

練緯威之部

一練緯威ハ糸緯を左子ゝ細ゝたゝゝ重ゝて威ス也何色の糸
緯威と云べゝ色ハ好ゝ好ゝ練緯トハ経ゝ生糸
て緯ハ練糸ゝ織ル反糸緯と云也 練貫と云ハ也 糸威ハ

（糸緯ハ今のちぐらの糸なり）

練緯威と云ハ各ハ糸きる也

糸威之部

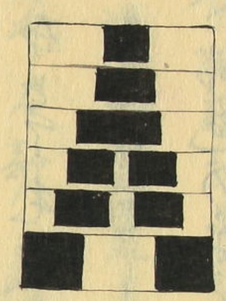
一紅毒威黄糸威白糸威玉糸威赤糸威前黄糸威紫糸威并
糸威等ハ糸の子細ゝ名甚色の糸ゝおどゝたる也
一藤威と云ハ茄色糸威也こゝす常の糸ゝ威ス也茄色糸威
こゝハ長くて八ゝゝ畧ゝて茄威と云色 萌黄糸威と
云を略ゝて云ゝ萌黄威と云ゝ 萌黄威を畧ゝて萌威と
云ゝ皆同例也
一黄櫨威と云ハ黄ゝ色の糸ゝ威ス也ゝ色ハ黄色ハ赤
ゝゝゝゝゝ色也黄櫨の二字をゝゝゝゝゝ色ゝゝの木一名ハ

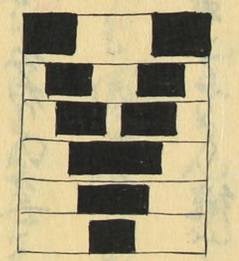
百首御歌須徳院一日八〜こをちの村のこずゑもうつし〜秋風そふく
文應二年毎日一首ノ中民部ノ為家　ひりはの山もこがらし峯のこさくホコ　ひとり紅ノ　ちぢのもみぢ
右歌見ヲ支木集

紫色　黄色ノ花〜さ〜たる色〜ある也　後ノハ　紅〜ある也　和歌
ゆふづくよ　ちらしもむハ　氏事也　初のゆど　黄〜赤〜さ〜たる
紫色を　似せて　染をそ　ど色ノ也

一　褐色威ハ　ちゃ色の糸を　威ス也　かち色も　かつ色ともゝ
勝ノ　ふる　ふ　ふ　て　軍陣ノ　専用ハ　色ノ　ちん色ノ　云ハ
あかまり也　褐色ハ　藍ヲ濃くして　紺ヨリも　猶濃ク　染ル
たゝを　色也　右歌、　染ル　ちゝ　飾磨　褐　ちゝの　ちゝを　ちゝ　ちゝ　ぬれ
てを　ふき　染ル　ちゝ　ちゝ　ぬれ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ちゝて　ちゝて　ちゝハ　ちゝ　ちゝ　ちゝ

一 沃浮威ハ二条の糸を威す也一条ハ地色丹を一色ハ
もゑだらの形化形乃ゆゑ三岐の形を袖糸摺ゆゑ威す也地色
も三岐の形も何色と定りたるハなし何色を也用ゐし胴
ハ地色とする也 逆沃浮威ハ右丹三岐の形をさうゝ海ゑがゝし
たるを云也





一 櫻鳥威ハ かゝ者の羽を似せゝ威也 かゝ者ハ大サ云
ゑゝり程も有ゝ頭の毛青くゝ者 黒き班の文あり羽

色も青く者ゑゝ黒き班の文あり背の色ハ栗色
其羽青ゝり色ハ 黒班あり てゝ川てきを似せて形く
色の糸ゝ黒糸を すぐゝゑる組ませる糸を以て威すゝ其
糸

右の説たゝ者ゑゝ黒き色ゝ者ゑゝ
かゝ者ハ 右歌ハ 大木集巻三 永享四年百首後歌朝臣
堺州次郎百首
なかゝ夏麻 歌
ゝ上山の者雅 柴
ゝ有り
かゝ者ゑゝ威の かゝりの字 鶏 鶏 鶏

一 鋪目威ハ二色の糸を以て袖草摺にすぢ[illegible]ほどりめをなしてそを考へて威ス也白と紅なるもの[illegible]ハ彩の茂目の鎧なるもの[illegible]色

此外も准じて知るべし あめかきりめこれを略して[illegible]

めをもて又ちきりめを畧して[illegible]きめを[illegible]色 それハ[illegible]きめとハ下限

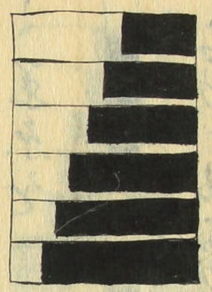
同と書くべきなれども其初よりつきて茂目と書来る也

茂目ふこらんたる鎧とも云 旧記ハ[illegible]

色ハ何[illegible]も定らず

まきりたる中も[illegible]きの糸又隅の方をかがりもきるも[illegible]の糸をまぜて

もきるあり 右たてよこきるもあり



まきこうるとハ 薄ノ字のかりカサルこと

一 色〻威ハ五色英間色を表色ハ[illegible]色の順も定なるべし色の順も定なるべし只色を集さるれと[illegible]色白黄

色〻威ハ[illegible]
後人五音威ハ
新作と云たれ
ども五音威ハ
名古記見ヘズ

赤ト紫青書と萌木黒と緋などを並色ハ一生〻茂を奪ふ

あざやかなるべし色をうばふ故に糸ぐりをもぐし胴を色〻

一 紫威濃ハ すべて濃 坐滋なるも書 胴ハ薄紫也 袖草摺ハ上ハ薄紫中ハ中紫下ハ本色也 一説に上を紫にして中を緋にする

一 紅威濃ハ胴ハ薄色也 袖草摺ハ上ハ薄紅中ハ中紅下ハ本色也

すべて在色濃也 一説に上を紅にして中を紫耳

一 耳威濃ハ 耳坐滋 耳ハ袖草摺の竪北両端也耳を威濃ハ

やう濃ッすべき色ハ何色にても耳を隠く小濃ッする也 [illegible]色ハ

一 緋威濃ハ胴ハ花田色也 袖草摺ハ上ハ[illegible]色中ハ濃き花田色

下ハ緋也 此外何色のもの[illegible]色を用て[illegible]

[illegible]色中ハ[illegible]色

又上ハ薄黄色中ハ[illegible]色

下ハ[illegible]色〻

一 ちゝ濃ハ何色なりもみ〳〵し ほもゝ上をゝ色うすく しゝすゝ
をゞ濃〳〵すゝ也一説ハちゝ濃ハ紫すゝ色 紅ちゝ濃の二ツ
に限るゝゝとゝハあやまりゝ也 何色ゝもある事也 古書をゝ
てゝ考べき也

一 黄櫨匂(ハシ)の鎧とゝハ 上をゝゞ色の糸ゝ〳〵てゝ前ゝ毛ゝ袖革
ゝりの革を黄色ゝゝゝ又其下(次)をうゝ黄色ゝ威ゝをゝ也

一 萠木(モエギ)匂ハ 上を萠木色ゝゝ 袖革ゝすゝの革をうゝす萠木ゝ
ゝゝ革ゝ次(ゝゝ)を上ヨリも猶うゝき萠木色ゝすゝ也

一 妻匂ト云ハ 片方ゝハ 袖革摺の両端をゝ色也 袖革摺の両端を
色うゝく威ゝ也 ゝゝを濃き色ゝゝて 袖革摺の両端をハ
うゝ色ゝゝて其外ハ移又うゝす色ゝすゝを云也

一 肩匂(ワタニホヒ)ト云ハ 袖の上の方をゝ匂ゝ威ゝ也 袖の下の方をゝ濃き
色ゝゝて上ヨリ二段めをハ中(ナカ)色ゝゝて 其上の一段をハうゝす色
ゝゝも也 ゝゝ色ゝも 肩匂ハ 方〳〵 肩匂の肩乃字かゝゝハ
ゝ肩すゝゝとゝゝむ也 肩ゝゝと書ゝゝゝ おゝとゝゝ肩上ゝ
ゝゝゝゝぶゝゝゝゝゝゝむ 皆同例也

一 肩匂(ハタ) 妻匂の類ゝゝ〳〵ゝ匂ト云ハ 沉香 薫物(クキモノ)ゝゝの香(ニホヒ)也
物の香ハ物のゝゝゝゝゝゝ

何旬ト云ト耳糸ヲ旬ノ糸ト云トハ別事也耳糸ノ上恵ベカラズ

鶯(マユズミ)ノ上ノ方ヲ色濃クシテ下ヲハ薄クシテ中ノ方ヲ少シ色濃キ也 鎧ノ威毛ノ白ト云モ同ジ色也 何色ニテモアル也 物射ヲ濃キ色ニテ末ニ到テハ中色(ナカイロ)ニテ其次ヲ薄キ色ニスル也 何ノ色モ同ジ

一 肩白(ワタシロ)ト云ハ 何色ノ威毛ニテモ肩ノ色ヲ白クスル也 袖ノ上二段ヲ白クスル也 赤威ハ物ヲ茜染ノ糸ニテ威シ袖モ赤威ニテ 袖ノ上二段ハ白糸ニテ威ス也

一 妻取(ツマドリ)ハ 妻ト云ハ 袖草摺ノ両端ヲ云 取ト云ハ 袖草摺ノ両端ヲ云 取ハ 袖草摺ノ両端ヲ云 取ハ 袖草摺ノ両端ヲ云 取

大荒目之部

一 大荒目（ヲヽアラノ）と云ハ威毛の名にハあらず札の銀やらし也大あらめハ札を少札ハ札の巾を半〻切りたる斗也大巾あらと云ハ大あらに同也（文トめ五音通スル故大巾四を大あらめと云）札を張るハ大〻あらく間を空〻ほ也大巾〻めらく（ぢ〻ら〻く）ふあらめと云事ハ多〻

一 三枚草の大あらめと云ハ札を作るに用ふる草三枚重ねて厚〻〻組たるを也（大あらめハ常の後りハ薄く成れ共古法刀の鬘士着也）

一 金まぜの大荒目と云ハいくめ草二枚の又鉄（鉄）の板ゲを一枚まぜて組たるを也（黒革威の大荒目と云ハ黒革ばかりにてもよろし）

一 一枚まぜの大あらめと云也 ちの金まぜの大あらめ也

鉄（カナドリ）胴之部

繪圖ニ見

一 ふ胴と云ハ鎧ふハあらず後をうちのべて胴を作りたる也袖も草ずりもふ〻胴ぐるみ作りうるしぬる也是をふぐりと云又ぬり（漆）胴と云也袖も第すもなく胴斗なる故ふ胴も云加ゲ〻四記を見るふふ胴ハ作りを弓刀の武者鎧の六ふ〻ふ〻ふ〻着ん物也力量弱き者ハふ〻ふ〻べふ〻ず

一 包胴と云ハ古の後胴を紙子濡子或ハ深草等にて包たる也包胴と云を鎧の胴を包むと云厚〻ふ〻ふ〻ふ

一 相生の威毛ハ 木性の人ハ黒（水生木ノ 水ノ色） 火性の人ハ青（木生火ノ 木ノ色） 土性の人ハ赤（火生土ノ 火ノ色）

金性の人ハ黄（土生金ノ 土ノ色） 水性の人ハ白（金生水ノ 金ノ色） 何もよし吉也

一 相剋の威毛ハ 木性の人ハ白（金剋木 金ノ色） 火性の人ハ黒（水剋火 水ノ色） 土性の人ハ青（木剋土 木ノ色）

金性の人ハ赤（火剋金 火ノ色） 水性の人ハ黄（土剋水 土ノ色） 何もよし也

吉凶右ハ如くに習ふ事なれども ふく 吉凶ハ人ごとに

ゝをしるべし 相生の鎧を着したりとも 忠義を

高き武勇をとげずハ必 ゝ ゝ

四姓之鎧

一 源氏ハ黒色 平氏ハ紫色 藤原氏ハ萌木色 橘氏ハ黄色を

用ひハ 清和天皇の御時 関白良房公 勅命をうけたまはりて

如此定めおかれども 又一説ニハ 村上天皇の御時 天暦年中

定まりしとも云 此両説 ふかし 世に申ならはしたるのみ

なれども 記録 書等ハ曾而見ざるゆゑに用ひ

らるゝ也 四姓の鎧 定りたるハ 近き事也

雑記

一 冑 ハ 面頰のよだれかけ 猩の袖 まきりせんぎんの板

の縁 乃 板ヲハ 縅の板と云 菱縫 あるハ 也 縅 猩の

板をハ 行縅 と云 めづらしき也 おしゆけのさゝ板も 菱縫 有 事

鎧の裏を包む 織物をハ おとしきぬと云 うけうゝ 也

草ふかく包ひとも おとしきぬと云

是定のたゞしき云ハいとゝ ところ くぬひ うもの はたゞや又小さく〳〵のべ〳〵 草の紋ゝ ん 撫子 の目ノウチヲヅ しるしたゞし

一 うけうゝ 当世 目ニ ヒ ヒ ヒ ヒ 式正古制ノ鎧ニハウケウヲヲシ

一離物(ハナシモノ)ハ胴の威毛と袖の威毛の色違たるを云也

一縫延(ヌイノベ)と云ハ鎧の胴の射向(いむかい)の脇をとぢつゝひきのべ物出来しゝ後 此の鎧のごとく 射向の脇ふてふつゝひきのべたるを云也

一鎧をきる長と云ハ大将の法度と限たる事也と云事也 平侍のをもきる長と云也 大将のをハ御の字をそへて御着長(キセナガ)と云也 きる長とハ鎧の異名也 胴左腹巻などハきる長 鎧ハ名ばかりもきる長 着長(キセナガ)と云也 着背(キセナガ)ト書ハ誤(ホ)也 着腹巻 云ふるをきる者と覚たる人多りあやまり也

一具足と云も鎧の事也 具足トハ物を取揃たるを具足

鎧ぶとの二つの外ハ子当の類の小道具ハ具足ト云

と云也 射手具足 楽器の具足 仏前の三具足などゝ云也 取揃と云也 具ハ云ふ心ハ足ハ足と云也 足ハ足と云也 物の取揃ひとけめ多きを具足と云 鎧も袖 足たる小手すね 其外取揃(揃)る故具足と云也 軍陣の具足と云事也 一説ハ大将のを鎧と云 平侍のを具足と云 亦一説ハ背(皆)のを鎧ト云 当世のを具足と云 此両説行なるも非也 鎌倉年中行事に御鎧白糸是モ被宦中ノ宿老両人シテ持テ出ル時役人出向テ上手(ウワデ)勤(キン)スル人御具足ノ右ノ方ヲ受取トアリ是ハヨリ鎧トモ具足トモいひ云る説也 大将平侍ノ差別多 昔今の分別多き事を知るべし

一 伊勢武者ハ皆緋威の鎧きて宇治の網代ハ鎧りぬるかと云

此哥源平盛衰記ニハ作者誰トモナシ 又伊勢武者ハトモ云 五文字ノ白児堂トアリ ホホノ七文字カリヌルヤナトニフカリケルカナトアリ 白児堂ハ伊勢国白児トニ所ノ人〻ナリ

平宗物語ニ見ヘタリ

昔平家の軍兵緋威の鎧きて宇治川ニなりもてしを見て

源三位頼政ノ子

伊豆ノ仲綱ガ子〻孫也 宇治川ニ氷魚と云魚あり少多

世〻緋威をしるる歟也 此歟ヨリて後人氷魚威ト云威毛

を作り出そり 仲綱の旗ハ緋威也 氷魚威ハ名古紀ニ三〻ズ新作ヘ

一 昔貝足当世の具足ト云事 昔貝足ハ前ニ記し 繪畫ある

当世具足ノ最初ニ見ヘタリ

ハ鎧の多也 当世の具足ト云ハ腹巻胴丸多の形のごと

脇板を用すて右の袖ニ引合セ弦巻ヲカ障子板せんぎの板

尾板迄板多〻草ぶり七枚より明ヲニツヨリ組すて甲

も以西多きもあり吹返あるも 甚ハ小し 足ハ應仁年中の大乱

近代鎧ノ小具足ノ中ニ脇引ト云物アリワキノフラヲヲグ物 古ハ無キ物ニシテ腰病道具也此外当世腰病道具ハ新作多カルベシ

久〻ニ五ツ出たるばかり鎧の作り様も人〻の好まるを

作りし 程小鎧ハ昔ありしごとく清尚再拝分の多人

多り迴り肩当多〻多物を作り法人鎧ニ昔ハ弦巻障子

板其外の物をもそなぶる 捨〻ふるふりて昔鎧ハ皆ありたるを

作るより馬形実記ハ具足を人のこんとあんハ 時持ちあるを

南世の具足なる多〻ハ多くを拵て見せ申べしとて 此書

應仁以後の書多級当世の具足ニ多くしるるべしとかを捉

てを見せ申べ〻多昔の鎧ハ多くをやはり多るを提を持ち

南世の具足ハ多ぐかの所かくれ拵てをするを也

一 腹巻の多足ハ背ニ合する也 合めて背板をはて〻すを間を

かわ也 背板ハ鎧の脇楯の如シ又背板をあてすり引合する板ふ
作ることも有り袖ハすこし近代ハ袖あるも有り又障子板尾尾
板せんすんれ板弦之あるもあり草すりハ前後左右合て也有り
小札毛引ふの事ハ鎧のごとし 古代ハ後老を直高侍衣あ
の下に着たるを下腹巻と云也下腹巻ハ物あこハ着
亦直垂狩衣あるの上に着ズルヲ上腹巻と言

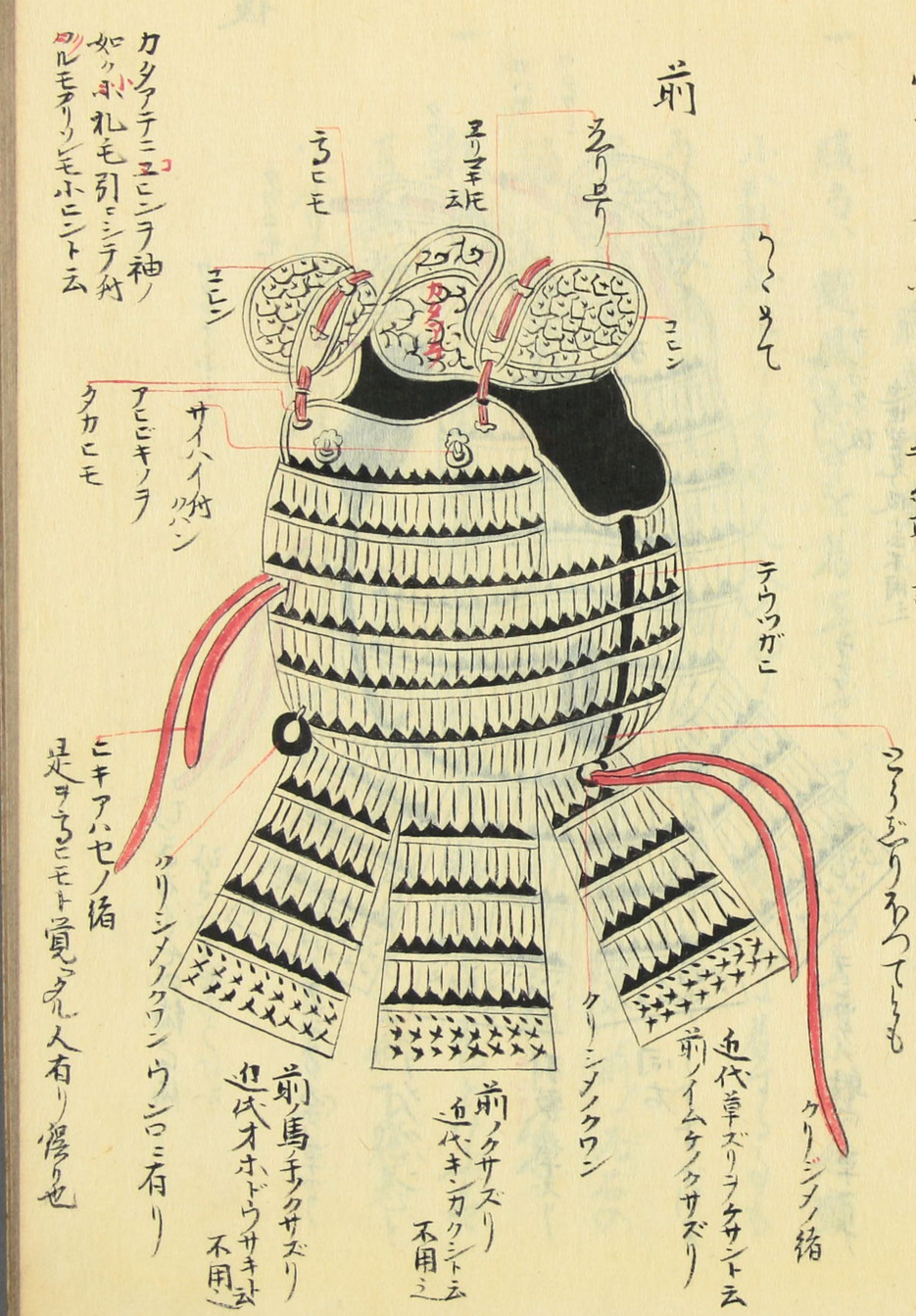
腹巻背板の圖

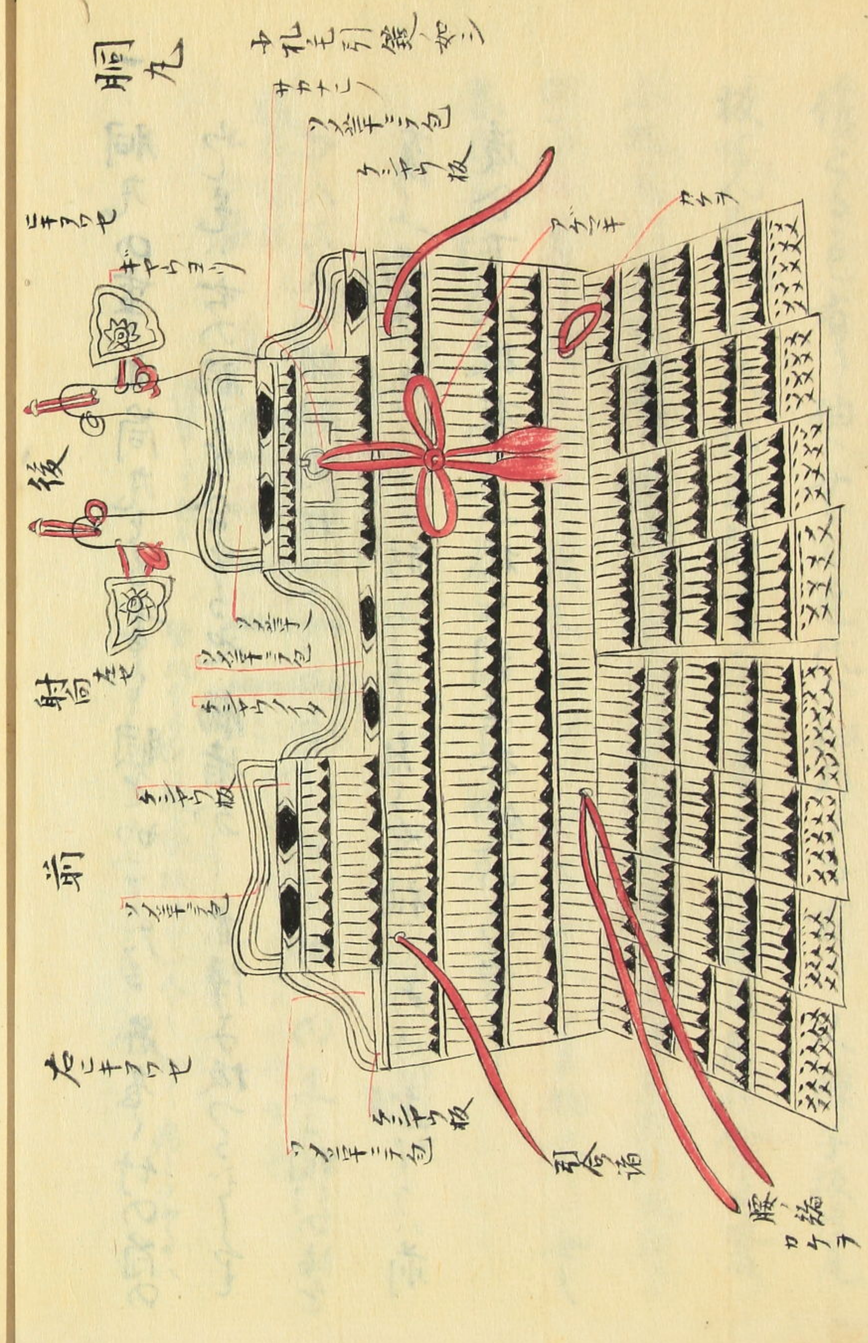
腹巻ノ背ノ合せめの上ニ当ル也
背板のもと腹巻の板と引合すれハ病ことすハ
叩ることもふまじきこと也

一 胴丸の事亦筒丸とも書く胴をかこたる所也竹の筒の
如き是ハ女の脇にて合する也 脇楯ハ亦障子板つるぐしも
せんたんの板鳩尾板なとも有り かく板 の上に桐の絵を
彫り物を 杏葉(キヤウヨウ)の形あり草すりハ袖をあり 草
後合て八枚有り小札毛引其外鎧のごとし
胴の事 胴丸ハ札ノ一枚くをたがきふすると 鎧の如りかくいふし

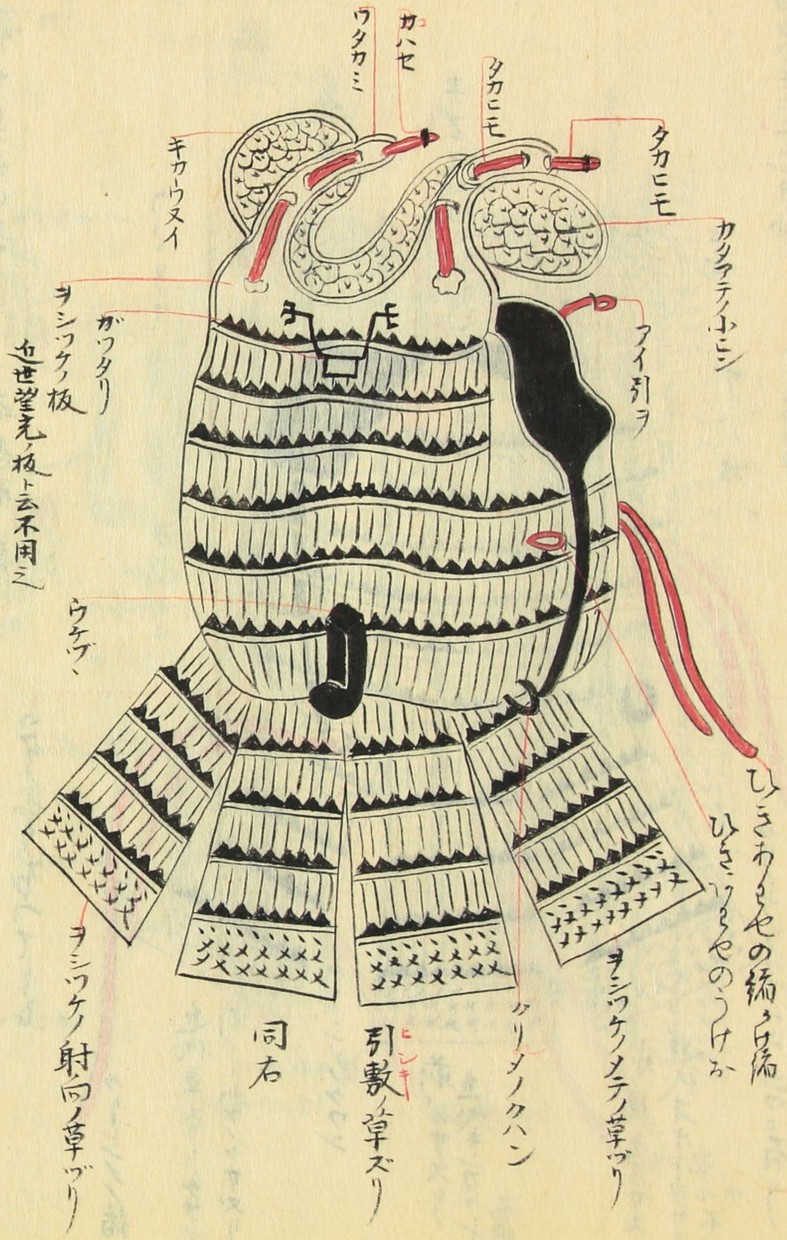
一 當世具足の系

委細前ニ記ス





後

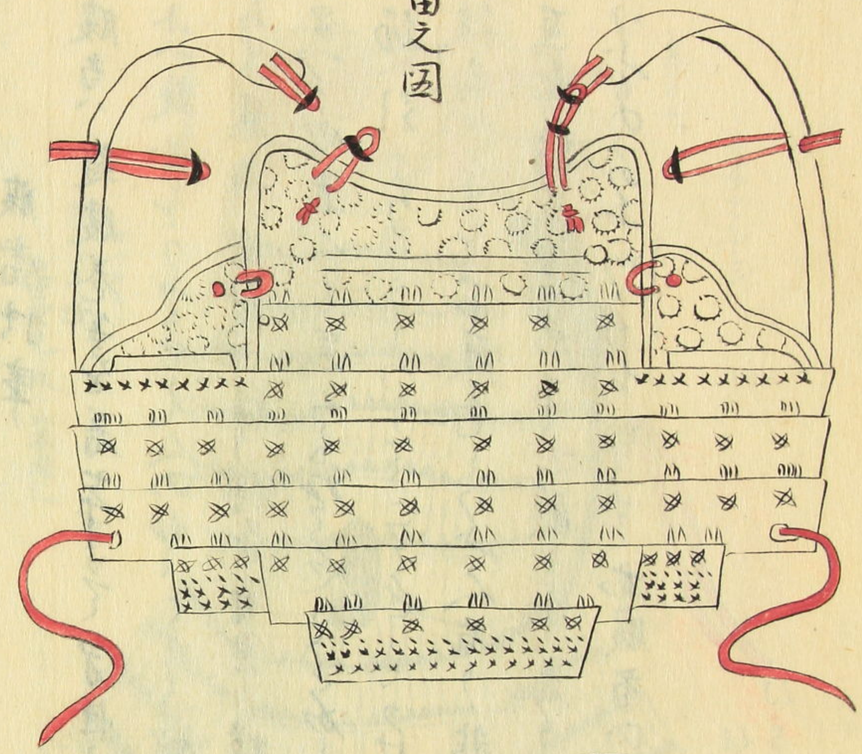


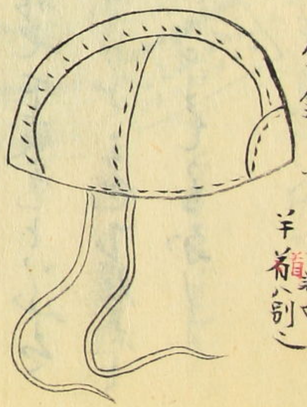
腹當ノ事

一 腹当ハ鎧腹巻等を着セずして才條ゝ少之時小用ゐる頭小ハ鉄仟(カナバチ)をゝゐる也又人の如くゝゝて鎧の下ニ着するも有り腹当ハ牛皮、袴ゝ物を射ゐる(ケ)様ゝ長くしてすぐけゝゝゐる也赤ゝも黒ゝも白ゝゝ有ゝ也ゝゝ前ゝ左右の物へ引まゝゝゝゝゝてゝゝ也(ゝし)ゝけ下の緒を結ぶ

一 後当のゝゝを下腹巻と云ふ人有り非也下腹巻と云ふも直垂狩衣ゝゝゝの下ふ腹巻を着ゝゝゝと云也下腹巻と云ふの如ふ内ゝゝゝ赤腹当のゝゝゝゝゝゝ

腹當之図



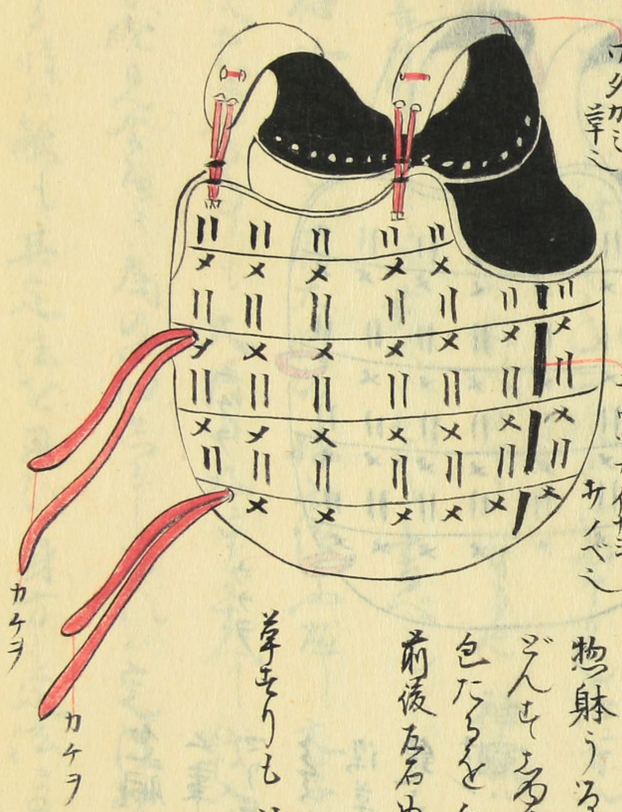


カナバチ
鉄鉢之冨
是ク半ヅリ
ト云ハ非也
半箱ハ別之

キクヒガ子ラウスク
ノベテ 作ル之 鉢ノ
内ニウケバリ有リ

一 鉄胴の事 亦かゝ胴とも云 委細前に記ス
為脇あがきあるべきふすべ。縫也

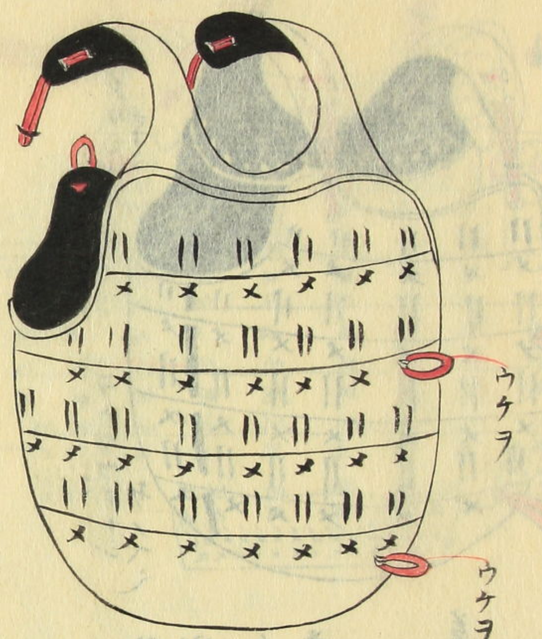
前



物脇うろこ也 又是ノ
ごんも 為すなあ革にて
包たるを包胴と云也
前後左右共ヲ包ム也

革ならも 神もなし

後



包胴ト云ヲ鎧ノ胴ヲ包ム事ト得テハアセ
ヒリ也鎧ハ弦走リ
ヲ前ノ方ヲリ
深草ハ包ム也何ノ
鎧ニモ弦走ナキハ
ナシ

袖検之事

一 袖だるハ箔と二ツに折て中を裁べし長サハ袖二たけ二ハ
何と折めすてぬこハ表ニナシ普通ニハ箔を四ツに折て裁
長サハ袖一たけ小袖のさま二枚うけ小すし袖ニなしハ袖のもを
うず〳〵て真中よりも一ツ前へヨセテ なるも 袖験ハ射向ニ神仏
八幡大菩薩ト いさゝか前へよせて書べし

一 口付ニハ袖検の色ハ其大将の好ミ所ニ文字をかき神名仏
名或ハ仮名を書るゆへ大将の好ミすくなくば戦入ぶんたる時
敵ヲ方をと名ゆき為の袖なるしなれば定法なくば
定法なる時ハ敵も其定法を用ひ身方も定法を用る時ハ袖

（風流ニ袖ハ二ツのツケ紙一ツ抜ミウラノカタハ三ツノ緒ヲ幾ス如ク結ビイヅレモモヨカケラウラヘ引通ス）

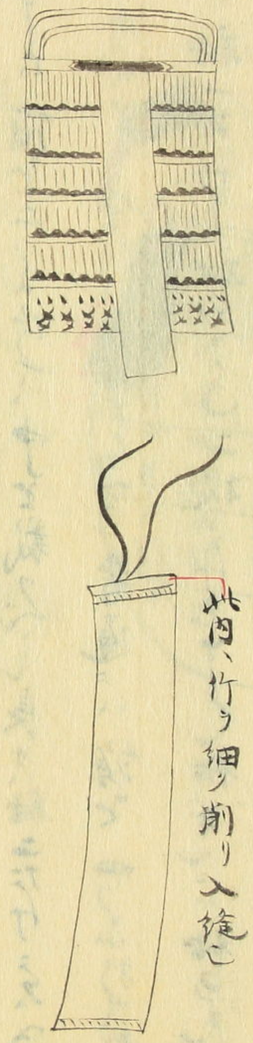
左右の袖もなるべし　笠ざるも是に同じ　袖なし

笠ざるハ諸軍勢一様なる也　大将ハ錦などを用ひ共

書付る文字　赤ハ紋ふ　諸家堪と同じ　かるべし　笠注又同し

胄ハ笠ざる　左右の袖ハ袖ざるを付る事　仍方ヲ見テ

モ敵味方のまぎらはしきゆへ為也



笠注（カサジルシ）の事

一笠ざるハ絹一幅也　表へ墨すべし　手ハ組そ也　又

ごけん度を　押く　格子結　手の間三寸八分　竿ハ竹ヲ

也　亦針かねをもまる也　大将の家の紋付る也　大将ハ錦又

ハ精好　作を用ひる也　長サハ一尺三寸也

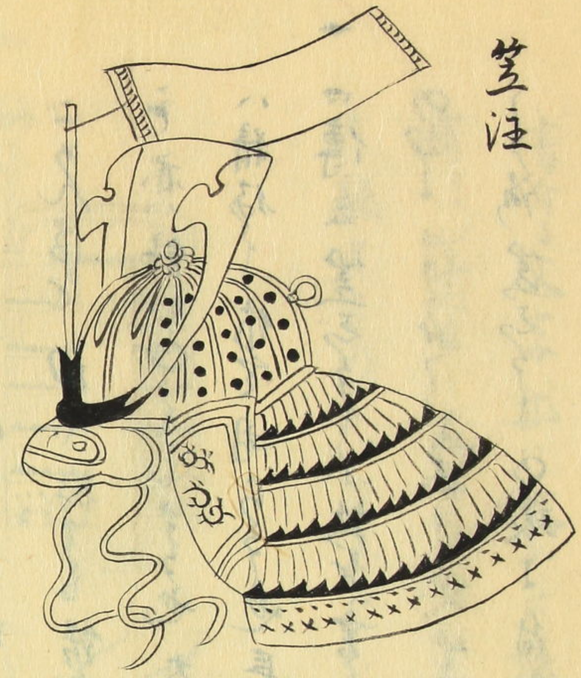
一傳云　笠ざる小紋を書く　のぶ限ら　ぬ　大将

の印　まるせる　べし　又　笠ざる　表向ヲ　ぶる時ハ　書の

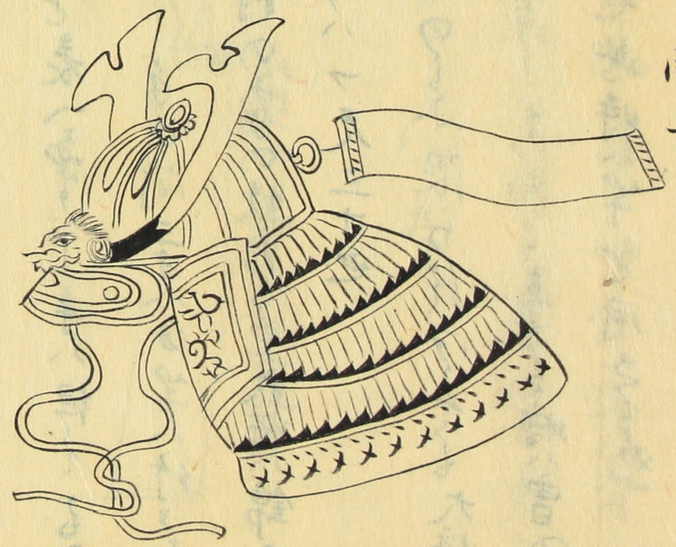
ぶ　の環ヲ付る也　此時ハ竿を用ひる也

一笠注　竿長サ一尺七寸也

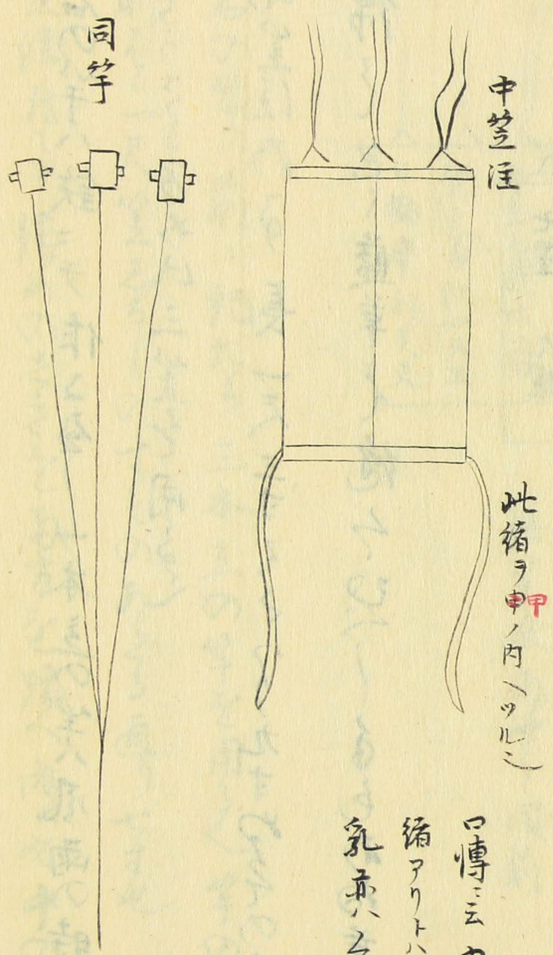
笠注



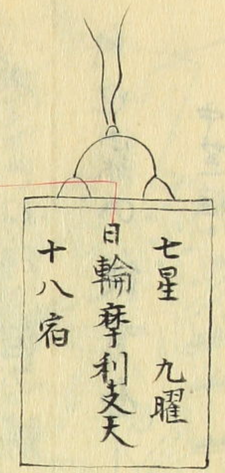
同上



一 中笠注の事 緒二幅を旗縫ふ縫べし 上下ふくさ有り
上ハ 細く竹を削り入る下のくりハ細き組を入て凡そ前
ハ通さぬ形ハ組の端ヲ曹の吹返しの内へつる緒有其緒
付也家の紋有度 長サハ一尺三寸也竿長サ一尺七寸

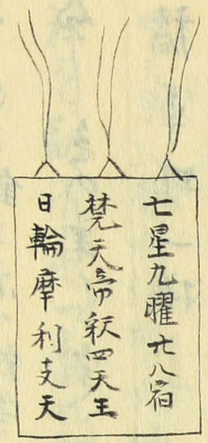


一 右の竿ハ鉄ニテ作る也一本立の竿ハ風雨の時もとり所なく
ろうさる所ゟ氏三笠を用る也
一 小笠原乃ゟ長 尺三寸ゟ九寸ゟその本を削り今
綿ゟ包ム藍草ゟ絡ひ〆もある草也



間七寸ニ取テ勝木ヲ結
右絡綿の時ハ文金銀せいこう(精好)の付ハ黒字を用也 勧請の下家
の紋ゟ一し小笠ゟ見也

竿



竿一尺七寸 性の能竹を削てすべし藍草ひきそえゟ小結也

此笠検(梅)ゟ同前

右の竿ハ前ニ記ゟ三本立の竿を用ゟ竿の仕(三)ゟ
前ゟ一尺笠ゟ〆のすそのあゟ面ゟ七寸也
一 笠注付ゟ結めのさきを南方を殺ゟ也中の緒ハ社奥方

へあるべきもの也

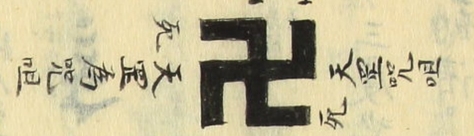
一 口傳に云 右の笠注の諸文七星九曜日輪廿八宿梵天帝釈摩利
支天に限りなる是法にあるべき 敵方を見分べき為の笠なるし
なれども銘文亦教等のるハ大時の心にまもる何なりとも用らる
べし色の事も定らるべし毎度まもるべし 袖験も笠注も
諸軍勢一様なるべし

一 是(具ム)是守之事一番に左の袖にまん字を左のむねをつきて書
まん字ハ 卍(マン) 此字也 摩利支天の字也 二番に胸板にばん
字を書べきばん字ハ (バン) 此字也 大日の字也 三番に右の袖
きりく字を書きりく字ハ (キリク) 此字也 阿弥陀の字也 (又大威徳明王字)

押付にほん字を書也 次に押付の方より 頭上ノ云天竺 ぼんに一字 金輪
書也 (ボロラシ) 大日の字也 次に面ヨリまわかるまふ動
の呪(ジュ)字を書 (コンロン) 是金輪也 (カンマン) 是不動の字也 此字ヲ書べきはカクマジキ共
人々の心にあり也

一 同勧請の事 左の袖に為の矢を置 御幣(申)を持(持)て左ヨリ板(申)
申る 三度也伊勢大神宮八幡大菩薩を勧請ハ也 右の袖氏
神を勧請ハ也一番目 勧請押付の方ヨリ 梵天帝釈四天王七
星九曜二十八宿 勧請申也 次に目ト矢ト幣トを持て (半)
加(仰)ハ 外獅子の下ハ置 被甲の所に中臣祓ヲヤ右ヨリ
三度打 弾指三ツして送り奉る也 亦目の加持の時被
甲護身(シン)の下呪(ジュ)也 勧請も引べきも引まきも
人々のうらにあり

一 具足の事 摩利支天ト書て一字 字ニ 切て摩ノ字ハ書の保呂
付の下に利の字ハ射向の袖に支の字ハ馬多の袖に天の字
ハ馬に付也鞆に絶てもべし
具足に付る守の事



守に たて むねも下に たてもべし 我家君ハ陣にもスベシ
死の字の方に戸をあくべからず 主と云字の向る
方とて周囲 具ハ具足の押めの守也
甚守も付きも付きのつけ方

一 鎧を着る事をよろふと云 吉 まりある詞也 或流に
矢ヲ負ざる者ハよろふてハ云へからず 具足なくても物の
具するとりろべし 此流派也矢ヲ負ずとも鎧着
をよろふとも云り
具足着る物の具スルト云ル矢を負ル時ハ何も矢こそよろふと云

一 鎧着る時吉方の子 閏 神の方へ向べし 其日より三ツメの
方也子の日ハ子丑寅 北 の方へ寅の方閏神の方也 北
の方死 亥 鬼門の方死 其年のふさうの方ふさうあるハ
五 女の方へ向べし 其日ヨリ九ツめ也子の日ハ子丑寅卯辰
巳午未申 かくて甲の方玉女の方也 又 俄あるハ行方
も 甲 置て南死東 又 天ハ氏神の方へ向べし 北ハ忌べし
御鎧召す次第の事
才一 手綱 たづなの事

負丈云西日悪方ヲ我心こうこもるハ山ヲ
物ろ心ものうらうらハ
山ヲあるうちうるれ
諸軍勢の中心こ
くる人も有べれハ
諸人の為に大将ハ
悪日悪方ヲ忘べし

才二 小袖

才三 下帯 下の帯ハ小袖の上ニ
才四 脛巾 きゃうん也
才五 ちらし
才六 ちぼし
才八 すゑあて 先左次右
才九 小手 小袖のうへ 先左次右
才十 袴 鎧直垂の下ヒリ
才七 ゆがけ 先右次ニ左
才十一 鎧 先左足 次右足
才十二 小太口 鎧ちらひの上ヒ
才十三 鎧直垂
才十四 直垂の腰帯
才十五 直垂の袖くゝり 先左次右
才十六 脇楯
才十七 鎧
才十八 鎧の上帯
才十九 ぢくゝぬき 先左次右
才二十 カ きゃうき
才十一 大力 弦袋
才十二 征矢 箙ヲ負ヒ
才十三 ちらし あて
才十四 弓
才十五 ちぼし

毋衣を多くべきなりハ征矢を負て後ニ
扇をハ鎧の引合ニさして又ハ立烏帽子ニ結付べし
鞭ハ右ニ 先 さして 後膝懸のむちさしの つぎ 横ニさし
置べし 箙ニも 鞭さしあれども是ハ弓ハ右の腰
赤ハ厩の者の腰ニさせども是ヲ鞭指の役と云
鎧着用の次第 諸流あるもの次第 引たるもあり或ハ貞
享のかれこれもあり用ゆべし 右の流儀
なれども常ニ着用されハ混雑して着用ニ困る有
鎧をもちゐ着るもの氏義の一つ有り
大将土陣の時ハ土陣の法有り式の者ハ三畝 鎧 ありて
少法あり此時甲冑を着して床机ニ腰かけて三畝 鎧 ハ
後法ニ立ハ中門ニ 太刀ハ 仁矢負ひ

有る也 御書を八人に持せて也是八後に出陣の時の
一 大将軍出陣の時旗指座 浦に出る法 御書の役御書を弓
の弦に懸て敵の膝をつきて吹返しより後の弓の緒に右の手
を懸て鉢の内に右の手を入て いつも取て 敵に見せ
御前に参て弓を引べし 弓を引まい八 御旗指に目前にて
弓を右の方へ引八すべし 後をみるべし
一 御書を大将に着せ申事 弓を引 馬をよせ書の緒を紀左の
手に持て也 右の手に 右のびの緒を一筋とりて手に
大将弓を脇にたてゝ右の手を八弦の方を内にして 前八ヨ
赤書の役人弓箭を帯し なら八弓を右へ取直 うでを
ぬき入て書を可参 但所によりて弓を引 何とも用る
事有 弓をもたず八馬頭箭を一手さすべし 是八御前に
色々の悪事と 此夫にまぎれ 有事 有り
一 口傳に云出陣の時 弓いでく又八あとにもたりし其外之に のい
まゝ事 ある時 弓頭箭を持て軍神を祈念し 箭のさき
に九字を切る也 此式 八障 難なりとも
一 人の鏡を見せ 時八先前を見 其後に射向の袖を見次に
右の袖を見て扨もどりて前より書ヨリ見べし 亦前を見て
次に書扨射向に 右の方 此式 也べし 弓を八見る 有
べ叩 下 其主かゝつけを見 さ也八馬手の脇ヨリあげさ

をもうべし 相模ハ胴ハちゃごろかくきねそれも あつそを
御鎧さふらふともらべし 其外ハをべ〻ず 鎧をハまりて
見せ物也 曽ゝ〻りゝ時も三方をゝうべし 和泉孫四郎

一 大将の御座を着て御供仕る時ハ脇指ハ鎧の外お
て〻着すべし 左ハ 弱指ハ座の内ゝ当て〻着スル物なれども
大将の御鎧着た時ハ右のめくスル也 其故ハ ゝ 大将其座
を立きゝ人ゝ あ〻時 先一番ゝ脇指ヲ取て めさ先ヲ ゝきが
為ゝ座の外ゝ 弱指を當ル也 是ハ実也 先ハ御鎧着の役人
の覚悟也

一 甲曽の字の事 甲ハ ゝ ゝ也 曽ハ ゝ ゝ也 東鑑ハも

右の通り小用ひたり 保平盛衰記 其外の諸書ハ多く甲
ゝ ゝ曽 ゝ ゝを用たり 甚ハ ゝ ゝ也 亦甲士甲兵ゝ
ゝ云時ハ甲の一字ゝ ゝ ゝも兼ゝ用ひる同也

一 武具の文字近代 ゝの文字を ゝて其文字ゝ
ゝの邪説をゝ ゝて偽ゝ ゝ ゝ
ら ゝ 曽の ゝハ腦の字を用べ ゝ 却死ゝ書 ゝ
の板ハ低板の板ゝ書べ ゝ 鷲勝板ゝ ゝ 其多し
ゝ ゝ ゝ 義理 ゝ ゝ字を用べ ゝの異字ゝ用て
謙敬ゝ ゝ ゝ ゝ 義理の風中孫 ゝ ゝハ ゝ ゝ
近代の人民 形仏ゝ 人をまど ゝ ゝ者ゝ用べ ゝ ゝ す物
ゝ ゝ て文字の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

軍用記　第四

目録

太刀　　尻鞘
弦袋　　火打袋
刀　　打力
重藤弓　　塗籠藤弓
征矢　　尖矢
鏑矢（鏑）　　箙
弓袋　武田流小笠原流　　鞲　緒留様武田小笠原両流
鋪皮　付引炭　　床机　付打板

太刀の事

一軍陣ニハ糸巻の太刀を帯せらる柄糸ハ源氏ハ黒平氏ハ紫
（見シ今時ハサセヌキ太刀ト云ハアヤマリセサセマキト云ハ刀ノ名）
藤原氏ハ萌黄撚氏ハ黄を用ゐ〻移色ともそれ〻かゝる
仔色を用ゐも其人〻の勇あも仕（任）スル也糸ハ平組そも又（又）大ハ
琴の糸ともも巻也赤ゝ巻も同色の糸ゝ（又兵庫鎖ハ物作ゝも用色し）
一金具ハ地を赤銅（銅）おしてゝ（熟子ナヽヲノ）の紋を打て金にて糸
の紋を打る又家の紋の外何ゝも好〻まゝ〻
一ふくりん（フクリン）こうた（コウタ）こじり（コジリ）きあし笠引ゝも者のゝ

自然本云
四性ニ柄前色ヨリ定ニハ何人ノ所為カ云ヒキ書ハ見ヘズ用ベカラズ

太力の事

一軍陣ニハ糸巻の太力を帯せらる柄糸ハ源氏ハ黒平氏ハ紫藤原氏ハ萌黄撚氏ハ黄を用ゐ　移色ともそれ〳〵に分れ仕る色を用ゐる其人〳〵の為ふ也仕スル也糸ハ平組ゝ也又琴の糸ゝも巻也赤ゝ巻も同色の糸ゝ

見ヲ今時ハサセヌキ太刀ト云ハアヤマリ也サヒマキト云ハ力ノ名

一金具ハ地を赤銅ふゝ〳〵魚子ナヽメノ物の形を打屈りを金ゝて糸の紋を付る又家の紋の外何ゝも好ゝまず屈し

一ふくりん　つち　こび　石突きあし　巻引ゆゝも也糸のゝ

一 至る迄金具の色紋ハ皆一様にあるべし

一 柄糸の下ハ柄を金らん巻べし大将軍ハ綿にし巻也

一 目貫の形象の紋赤ハ何にても無両面べし目貫ハ表裏両
方同一通り ハ也目貫の元をやくして則目打に用ル也
但さしらみ也表の目貫ハ目貫穴をかりひらき也

一 鍔ハ菱鍔也金ふくらん あるべし 赤銅也

一 大ちろえ二枚ハ鍔より少シ小形ハ鍔の形也是も赤銅ハの
ごとき象の紋赤を伺ふもちゐる紋ハ金也慶福有

一 小ちろえ四り其内二ツハ金二ツハ銀如此色を替べし

一 さらちろえハ赤銅たるべし小ちろえ色を替へさらちろえ
ハ大サ小ちろえ同一厚サハ小ちろえ同を殺さるたる程の厚サ
にして廻りに竪に五六厘ほどのふくらに菊座のかきざ
らを付也さらちろえハ金銀の小ちろえの同く重ねる也

一 ちろえ巻ハ麻糸のみも柄に同一に重ねる綿等に巻也

一 鞘ハ金のまもこ地赤ハ黒ぬり又朱ぬり又ハ梨地ぬり芋ヲキセテ
包むも好まるべし右のこと定法もあれ形ちの
無きまゝすべし

一 サや袋の事将軍の御太刀ハ伺ふもさや袋に入るさや袋ハ
綿ヲ金具の上ヨリきせてとうく縫ふもの尾鞘のごとあり

一 おびとりハ人たる又ハ雲の下又ハ布伺ふもかくたるべけ
て用也又家木の組ヲモ用 将軍家ハ人たる又後藤の布

用ひ也 刀ハ たゝも 宮の ゐも 唐ヨリ 渡たる 織 打の 各せ

一 太刀の寸尺ハ定法ハ 其人の力量ヨリて 長モ 短もあ

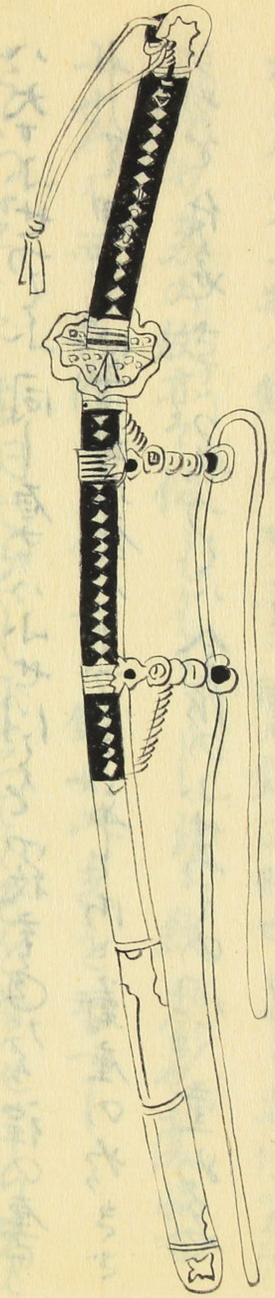
べし 亦力量ヨリも 短ヲ用ル事 古法也

一 こでぬきの事 藍草又ハ黒草を細ク切て 用也 柄の 接手

の 反方の 透方へ 通し 柄ヲ 持てうて 緒ヲ 廻シ よき 程の

ゆるカの ゆ 緒 むすぶ 反方 一ツ 二 結 余リハ 三寸ヲ 残

切べし



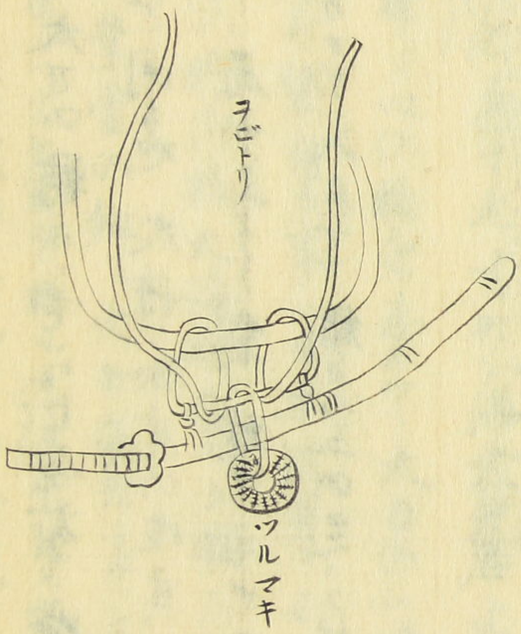
一 太刀を 色 申様 帯トリを 反方ヘ ハ 鎧の 上帯の 間へ 上ヨリ

下へ 通し 其 端ヲ 足間へ 引出して 二の足の 方ハ 後一廻し 一の

足の 方ハ 前へ 廻して 脇へ 結て 其余リを 三ツ 巻のごとく 組て

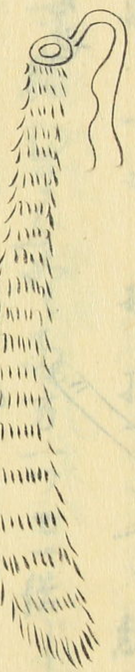
おのれ 置 通し 上帯に 太刀 足間の 一ツ当ル也 少 荷さう 耳

太刀ヲ 付ル也



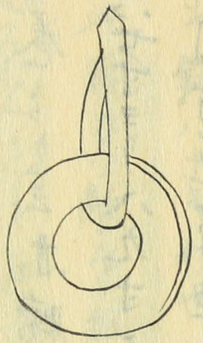
一尻鞘（シリサヤ）の事是ハ太刀の鞘日にてらし風雨に
さらされ尻鞘を用ゐる也　大将ハ虎の皮其次ハ熊の皮麻
の皮をも用べし　尻ヶふくろ袋に縫て用る也　太刀を差して
後に右づキの方ヨリ入るべし　緒ヲハ二の足にかけて結べし

尻鞘



一弦袋（ツル）ハ太刀のおびとりと称る也　丸ク草にて作る　鶴の羽ヲ二重に
して　こゝろに弦を表也　丸く穴あり　五六分斗の細キ草を通し
帯に縫也　其帯におびとりを通す也　太刀の足回に付べし

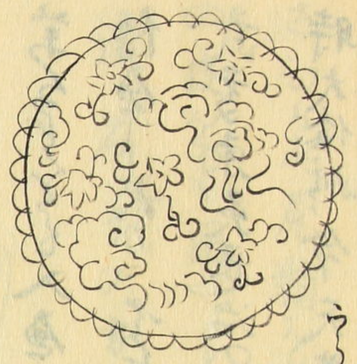
弦袋



経五寸斗

弦袋トハ弓を各也　後に弦を
ぬぐひ羽にたり　近代弦袋ト
を錦ぬぐひ縫ひ作るあり
なり弦袋とハ弦巻のなる也

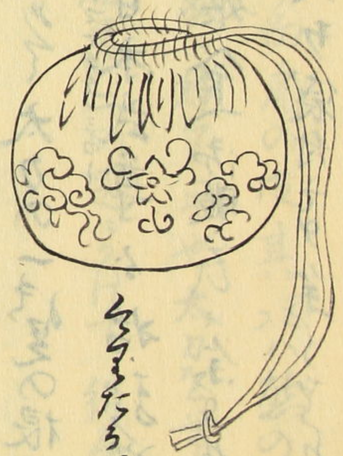
一火打袋の事是も太刀に付る也　織物を丸ク経六七寸ありて
ほそくして緒を通す也　火打石火口を入る也又
第ものども入る口の緒をあり　太刀の一ツ足の根に付
付る　太刀に火打袋付る事ハ日本武尊（ヤマトタケノミコト）が始る也日本
武尊東夷退治の時所焼大倭姫（ヤマトヒメノ）命に所賜ひし余りなり
時大倭姫命天業雲の剣に火打袋付て差そへ
給ふ類也常ハ火打袋を腰刀（サヤ巻の太刀）に付る也殿中ハ式三の時
太刀に火打袋付る　旧記に見タリ



ツカリ

うゝヲ付ル

立不定
寸法不定
織物ニカギラズ
深草ニテモ作ル

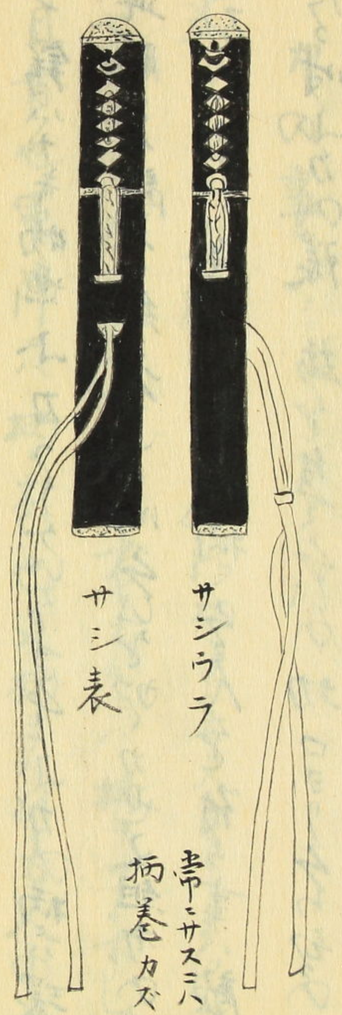


ムラタラ形

カの事

一カハ鞘巻ともゝ云赤腰カともゝ弦巻ゝ云
長サハ六七寸より八九寸迄也常ニ事スルニハ柄ヲすゞして
ともゝ形目貫也軍陣ニハ柄ヲ巻也又柄まきゝも人の好ニ
ホコルヘシ鍔ハナキ物也小カうぢをさすホカの柄ハ環ヲ
付る也此腰カハ敵を組敷ける時ムラを切カ也又組打の時ニ
鎧の透ゝを切ル迄也小カの柄ニムラを付る事ハ敵の首
ともゝなる時少カの張ニ編を付てムラの切口より内ゝ方ニ
編を通ス首ヲ捕ル為ニ時の付ニスル為也亦ゝ切ハ髪掻也
ゝ形をゝ甲をゝる瓜頭のつきゝりて加ゝ物也
其時手ニハゝれすゝかいしゝく也并すぐしゝゝ也
ゝハ千カ万ゝ加ゝ也依之カゝぢをハ鉄ゝ作らすして
赤銅ゝ作る也まりゝ紀為也此外も先のゝぢりたる
物ゝ夜ゝ也ゝ為の所用多し

一 刀を帯スル様是も鎧の上帯の間小さき方の緒を
小尻の方に一巻まきつけて置也小尻ヲハ弦巻の
穴に通スベシ 下緒ヲサヤに巻き 帯スル故 巻也
刀氏さや、巻子細ハ刀短き物故也 長き時 長子
出ハ さやに ぬけ 来ん 為 甚為に 鞘 小口 緒ヲ巻 結てき
やとも 懸 ふめて 置也 上帯ハ 刀の上 引 懸也

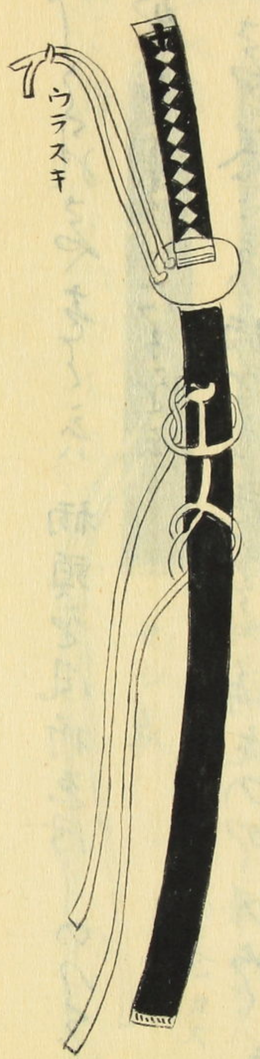


一 ふ所 ふれ 巻て云ハ 柄頭を風折烏帽子の ひたゝれの
如く かゝを きて たるを云
一 ひさや 巻ふ ハ 柄をも 鞘をも 海老の 甲の ごとく
ふを 朱塗 小さ也 是ハ 元 ぬきめ下緒を 結也 元
さめ下緒ハ ひさめ草と 黒き草に 赤く 染 ての 様 なる
形を 書 たるを 下緒 小スル也 小さりハ 海老の 腰を 丸 形 にて
尾の形も 作 るなり 緒ヲ下げて 太まの ごとく
一 さや 巻をちいさ 丸 ふも 言也 是ハ 打刀小 對 ふ云 詞也 打刀
ハ長き 物 なる故 さや 巻をハちいさ刀と云也

打刀の事

一 打刀ハ 打 刀 ふも云也 雑兵ハ 太刀を 帯スル事 なり 打刀を

常さんせ　扨刀長サハ人の刀量に依べシ　但刀量ヨリも
短ヲ用る事　扨也　鞘ハ太刀の造りの如く筋金を入べし
の扨刀ハ筋金なし　鍔のこと　革緒を通し　うづ巻さる也
一　扨刀事スル様ハ　緒の一方ヲ　ちりこの刑　二巻　まきて　一結ひ
一方を五寸程のけて　亦一巻　まきて　一結すも　ハ太刀の巻ちの如く
太のこと　鐺の巻ハ　鞘を　身て　右脇に　結ひ　太刀を　巻ス
ル時のこと　ハ　の方を　上へ　ゆる



一　常ハ　将軍家を初　諸侍　扨刀を　人ふ　せ　也　帯す
類物ハ　あ　軍陣ハ　雑兵ハ　是を　帯スル也　是ハ　中間小者も
扨刀を　帯スル事　ハ　貴賤共　常ハ　サヤ　ヒ　斗　巻スル也

弓之事

一　大将ハ　重藤の弓を　持　也　重藤ハ　藤　也　将軍　亦持
弓　人ハ　斟　敵すべし　重人ハ　也　こめ　弦　ゆ
亦　重藤　ハ　ぶりを　重藤　ハ　ふ　ぶり　上を　二巻
ぶ　ぶ　ぶ　人ハ　斟　敵すべし　大将の　持　也
一　重藤の弓　也　黒　ぬり　藤を　白　ぶり　弦の長サ　一寸　斗　同

を五斗置てすりべし夏方のうゝ藤ハせんたん色にすべし
上ハの七人色矢すゝ藤葉ヲ金て藤葉三十三也一説云ふぎり
ヨリ上藤葉廿六ふきり一ハ葉数二十八是三十六會廿八宿ゆゑ
うゝ色ハ一説上ハ藤葉廿八ふきり一ハ三十六葉数あるべしふさ
の下ハ事深ク王の呪摩利支天の呪ヲうすくゝ書て色て
其上を五色の綿ニ而巻て紫草ヲ以ふきりを十五ふ巻
黒草ニも巻し黒草ハ平人の義也云〻

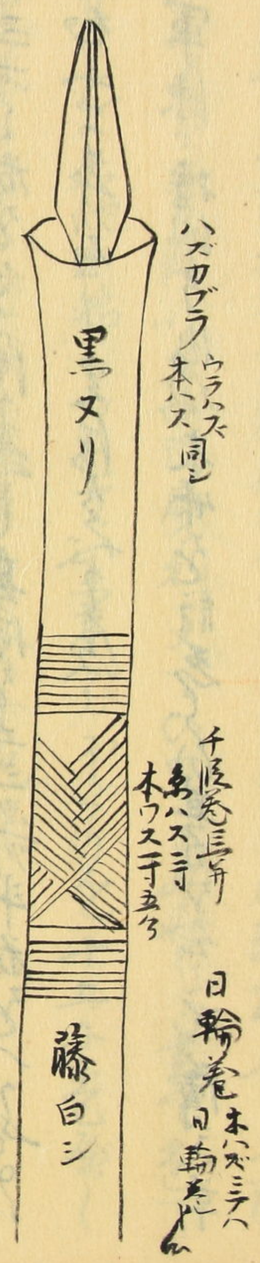
一口傳ニ重葉ハ藤ヲ好ク使ふ葉の名也葉の数ハ上ヨリ
ハ七人ニも亦ハ廿六ハ三十三ニモ遺ふべし数ハ物ニかゝる
ゆゑ廿八ハ廿八宿廿六ハ廿六會三十三ハ観音の三十三身也亦雲陸摩

利支天の呪を書入影事も人の物ニ依ゝ引ハ呪を入ル
も魔を退ケ怨敵を亡ス德ヲ本ヨリ備ヘてある物ニ

一平人ハ金ハ先藤を物也黒く染うゝ天ハ
三ツ葉を白ク染べし其同を二三ヶ所斗葉をつゝるハ
白ハ天ハ一定法なゝべゝ次

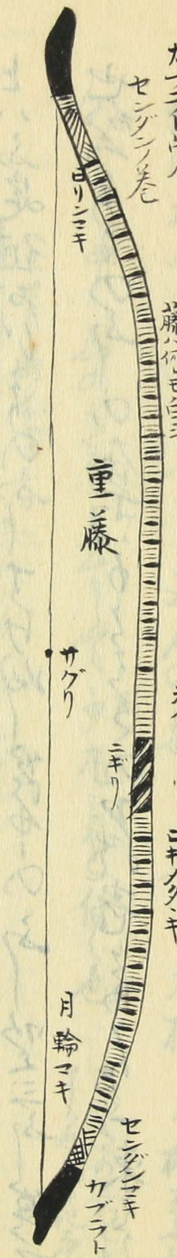
一軍陣ニ持用ル梅花木丹を能あぶり其分を白ニて薄き草
を寸漆小少小麦の粉を丸ませ色ハ赤ゝ天ハ
とすゝ丸ハ赤ませゝ赤ゝ丸ハ赤上を唐糸のふ紙
と巻ル新ゝ漆を付ル色能ハ布ハ巻ハ色
幾度も巻て好し砥石ハ少上をとゝぎて高麗刀を平に

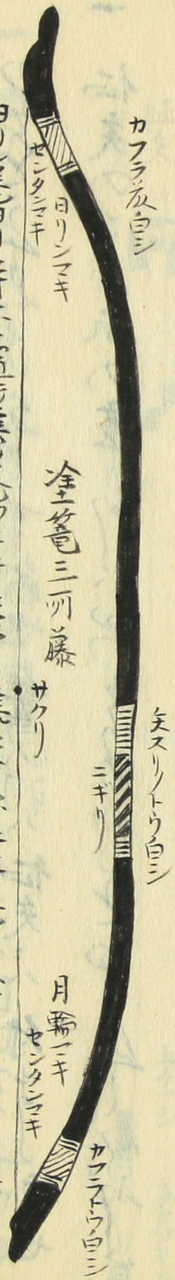
そ取上ぬるを黒くしそ重藤なども三つ巻なども藤を巻じ
ゆけどもらゆれハ百発百中あひてもなをふるゆくさを者も
なり大事なり和伝也



一弦ハ世代ゆるををぐし世代つるハ射あたる弦をもしらむる也
ゆるの世代弦ゆるハ是世 梅林射あたる弦をとり合もを引
あきり上ぬるを天すり藤と云
ゆぎり上ぬる皮ヲ引月たるく藤と云

唐糸にて巻様漆を引生漆ぬくぬる也





日リン巻ヨリ三寸ホト置ニ藤ヲ巻ツケテ矢スリノ藤五分ホド上ニテ巻トメ又二キリトヨリ皮ヲ巻ツケフ
本ハズノ月リン巻ノ上五分ホト置ニ巻トメテ三河皮ノ外ハノコラス皮ヲ黒クヌルナリ
矢スリトウ白シ

センタン巻ヨリ三寸ホド置ニ矢スリノ皮ノ五分ホト置ニ皮ヲ巻トメテセンタン巻矢スリ皮ヲハ白クシテ
カブラトウノコリハ皮ヲ黒クヌルナリニギリ上ハヌリコメ皮ニテマキリ下ハ二重皮ナリ

征矢の事

一 征矢ハ箙ニさす矢也 数ハ廿五サ十六也 世間ニ矢二つ有べし

一 切り征矢の切ハよハすぬ也 乃ち箭ハ矢ニ付ケ可ニ

たゝ取まぎらかしもまたるべし 白鳥ニハ赤ら〳〵さる也

一 征矢の羽ハきりふを有る也 將軍の羽也 平人ハ母ともに

かすをとうすべらかて可 鷲の羽ハ征矢ニハ付まゝき也

一 征矢のさゝれの事ハ切ハかつとりの尾を取ニしいれ箭

とハ云 但かけりのふ一すけ 箭の尾ハ三ふ箭ニ

也かつとりのふ一の先ハ白とき老とあり一束ニ

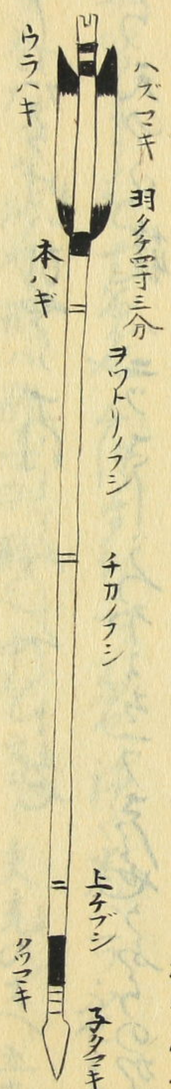
間を置ニかつとりのふ一を可ニ 玉ゆのあるさ有ハふ者ニ名

巻ふ一ニ有べし 白老も黒ニ有べし 白老ニ者赤老ニ

一 矢ハ九根本也 根の先あまりよまるけ也ハ 箙ニさす也 此あり

根の太ハ弓の力ふとり又人の弱ニよるべし 九根ニハ 柳 桜 桐

のゝ〳〵中ゝ志のさを立ずして少九ニを付る也



志のさの下を左ク
すると也志の花ゝを也

一 さゝり矢のすゝ一手の物也 羽ハ的矢の如 一ツハ内向 一ツハ外向 左

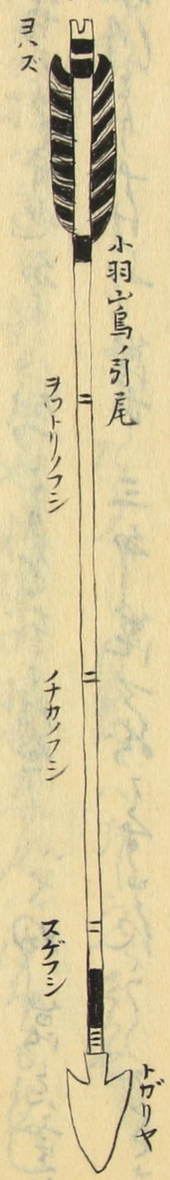
若ハよゝ手也 ハかつとりを左ニ尾ニ以ク 箭ニハ定組

かけとりすけ 箭中 三所 箭ニ結ニすまた 左ニ 右ニ

ゝき本 ゝきハ玉藻ニ結ニまた ハ左ニ 右ニ 老ニ 赤う

ゝ小地ゝ是ゝハ 何も 征矢ニ有 ゝまゝ也 ゝゝやうハ西

之也羽ハ鷲の羽也小羽ハ山鳥の引尾也小羽をもつて結まで
こしらへすべき羽中ハ雉子の尾也

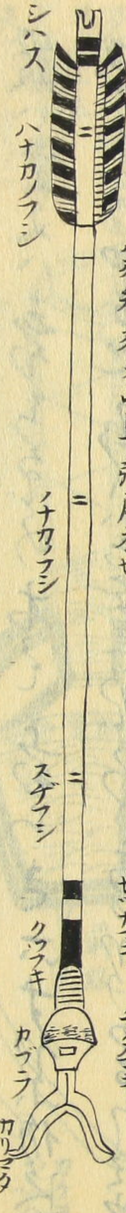


一征矢鏃尻こゞり矢ゆがの矢音を待るハひゆ〻ゆをと射ると也
ゆず〻たる時ハひゆ〻ゆ〻ゆをと也

一かぶら矢の篠ハ二ツさしうかるる二ツ高也うぶらのかく
さ〻ゝもすると云ハ畧儀也若ハ可若也ハ
まを矢ふるゝをたるる也羽ハ鷲羽也小羽ハ雉の尾をも是也
とりかとり用るるぶらのかゝふ限り二ぶを長くする也大きも

射ル矢ゆる故矢つをを能ひゝん高也常の矢庫かの用ヲ巻て其
ゆ〻ゝ中ゆ〻ゆる也是を矢つゆ也ト云也

一かぶらの長サ二尺也廉ハ角てけを三方こゆるを殘ひらふ
らゆかるゆるをとゆる也ケ法ゆ二ツ高也袴ゝ巻ハ二ツ巻ゆハ
長ク巻たるが結也形ハ瓶子の形也中を高く矢先のオ〻五巻
ゆる巻の方〻七巻ゆるべし赤ゆるゝをぬるべし



一かぶらのかぶらハ白鷺本也ゆハ羽中を巻べし幾節ト可定組
三節ゆ巻羽中のゆをすけゆ中ゆ中ゆて四節五節ゆもする

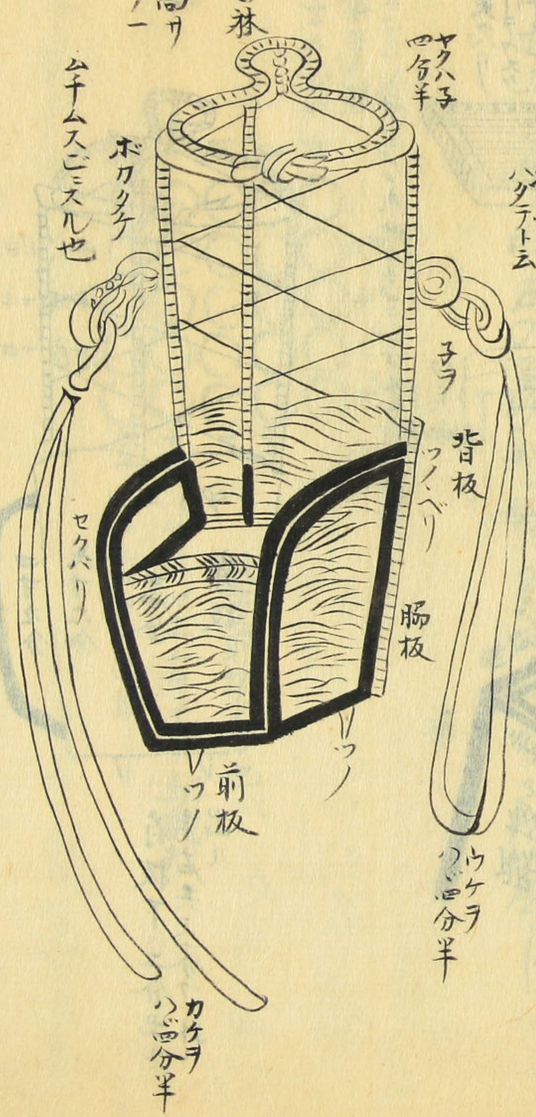
不苦習ひ得るの寸法不定弓の力小依べし

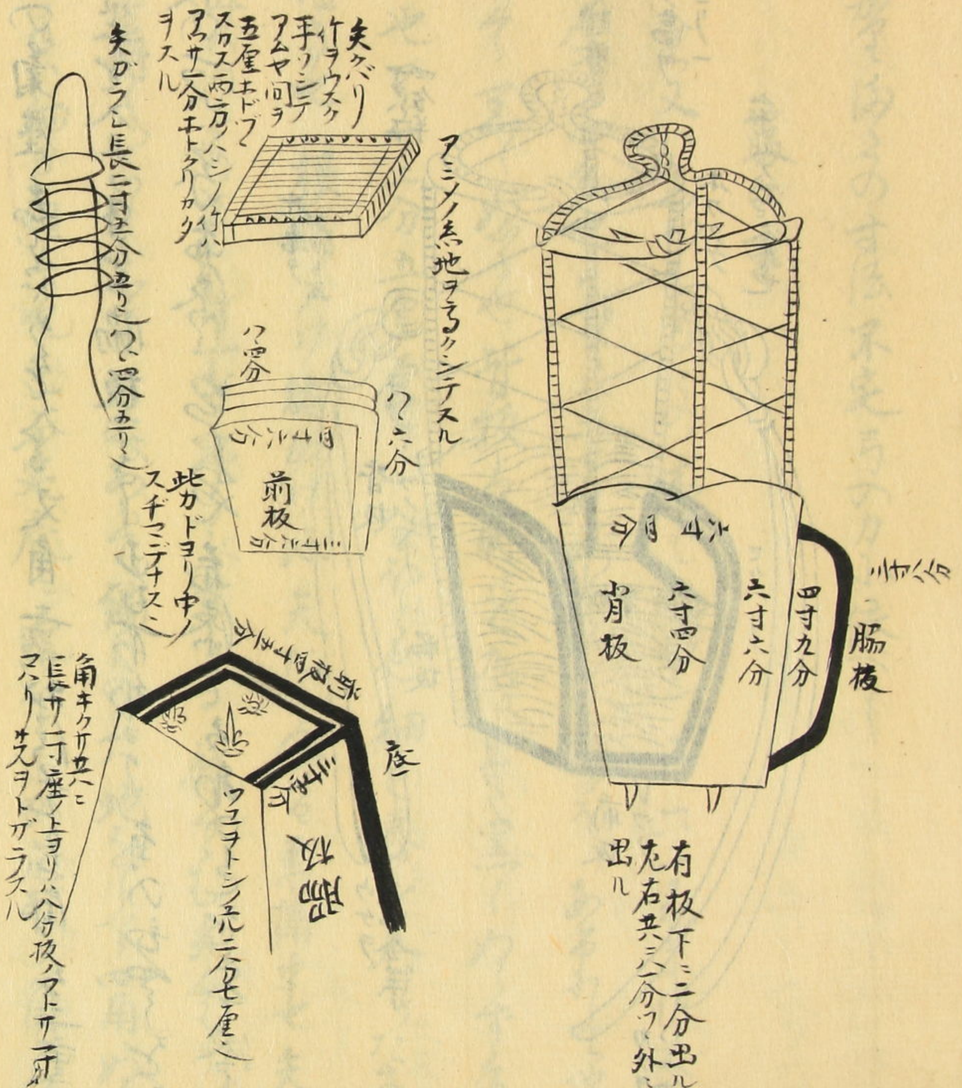
箙の事

一箙ハ革又ハ布にて作るべし 木にて上をらき六寸ハ作べ
板の厚サ四分也 前ハ六七厘ハ作べし 背板を角を丸くして黒くぬるべし
ハ鉄也 フトサ二分立厘厚サ一分ハ作べし 細き藤を巻たる
も同じ也 根緒うけ 緒ハ付 矢たゝ多落 菖蒲草也 矢
ハ竹を薄くこしらへ 草にて編 上を色ぶ草にて 絵にて矢ぐりハ
ハ細き組糸也 底に露なきの穴あり 角にて

ここらへの箙ヨ式三の箙ヤ云ヤうくやう別書有り大待の箙也

二重の菊座 ちとぐりを入る 又角ニ 出る花も角にて二重也
菊座を入れ 脇板小さく 出る所ハ角の如くにて
也 仮の所ハ 布漆 布漆とも 所のもを 文て漆也





右の寸法ハ大ナル箭也世ハそのまゝ小くも すくも

一箭小矢の三稼矢数ハ五五廿五四五廿四四十六とかく数を重ル

て四角、ゑら稼、サスベシ其内ゝゝ矢ニ加ゑら矢ニ其外皆

仙矢也 九五さす時左の号の如し絵ハ是こ准ー三ゝ屋ー

此方前板ノ方也

ム三八マヱムキナリ馬鎧矢
トムキナリ馬鎧

ハ宗こてエムキ
馬ノこと也
身ノこと也

ハ宗前板之言ハ

一 箙を負へき様馬手の脇後においてかの緒を引もの肩先よりけて前へ引なしうけ緒の長かの緒を通して結也 底の角ハ上帯の間ヨリ矢を出す也 矢を出す時に角ヲ下へ向て結を用

サカツラノ脇ウケヲ、弓手ノ脇下ヨリ前ヘトリソレラ石肩カケテウケヲノウナニカクラムスブ也

箙負ヒ傳アリトハ本文ニ印ホロシウケ緒ノワナ（カケ緒ヲトホシテ尻ワナニムスビ先ヲミツクモミ打チテフハサミヲクミ）是ヲ又キ出ス度ニ箙ヲ前ヘクリヨセテハアシ筆ラ心得テ居リ後ノワキ（手ヲヤリ矢ヲヌクベシ）オ説ヲ用ベキナリ本文説ハウリドウミフ思シ

矢と見るてゆる也負ふ時ハ記セシハテマドリテ思シ石筑ハ箙ヲ馬ヲチノワキ又ハ後ニオンアテ（カケ緒ヲ弓手ノ肩ノ上ヨリカケテ前ヘ）背板を負ヒ小ヒ負也 太刀をとる時箙をも負ふ也

一 弓袋ニハ弓を入れ也 袋の地ハ布也 其ハ十五ト云布を用ヒ是も後世ヨリ布ヲ用ル也

袋の事

一 弦の本ハ絹の糸の太ク長ク布を用ル也 其ハ大将軍ハ白布無紋ヲ用ル其外ハ白い浅黄ニ深白ノ紋を付ル一方ニ紋五ツ毎方合ヲ寸也

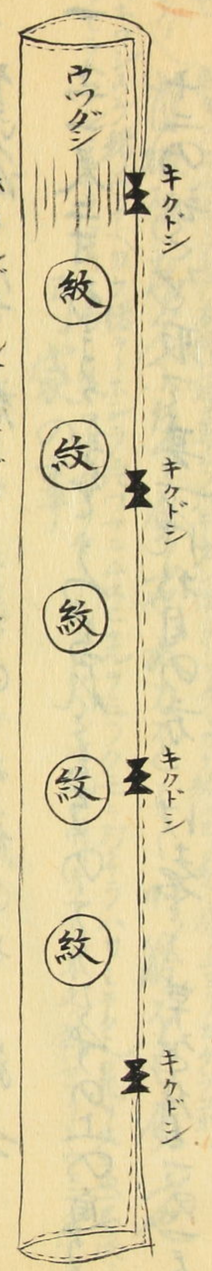
一 長サハ弓のたけ三つ半 上下一尺 弐寸ツヽ いつすぐしてしぼハ布を四ツニ折て一方二寸五分 亦ハ三寸ツヽ也

一 縫様の事 弓ハ長ク成の間ハ ふを通スル也 上下共ニ一尺二寸 ひの字ノ如ク縫ふ

一 上一尺二寸あるをうゑ弓のうしろすの上の通り十二の目を取て其所ハ目の方ニ けを通し草を付ル所の一尺二寸あるを分を ふを ひの方ニハ 初ごとくしぼ本ノ方の下通りを押ヘて三尺半の赤紋の緒ヲ結也

一 けを通し草ハ通し草とおん草と長二尺四寸 一寸二分先 尤さきを切り通し筆と上ごろん草と 中ニ童子中ニ りめを

入其穴ニ一方ヲ通ら せそなで二分半の黒草にて袋の形を
すりのうへ三ずの上の通りに申訳なく
一きくうぢハ上下のわくうぢの通りに一ツ中三所に ぬひめの上
かゝるなり

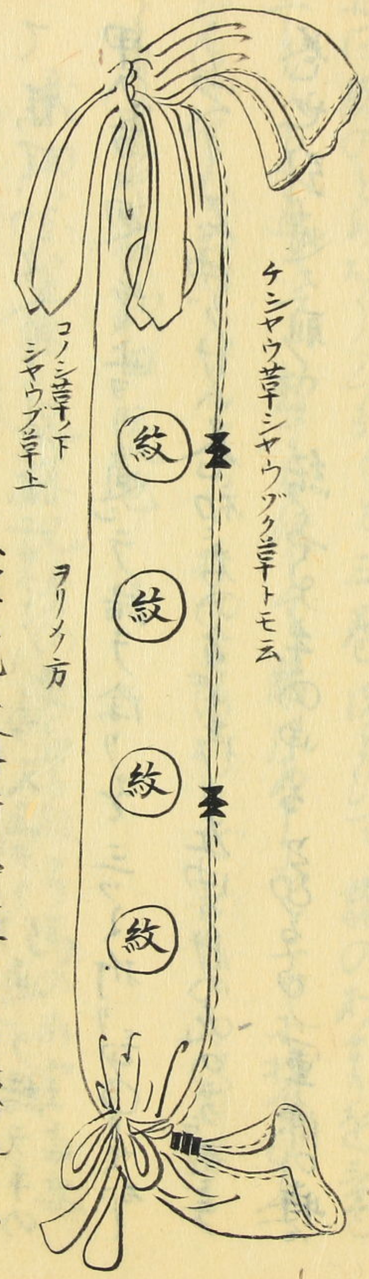


式方モダヲトル一方ハヒゲツ
両方ニテ十二ヒゲコニケシヤウ草有ル

竹目ノ方

袋ハ草や裏ナシ

けさ草ヲ結ブ方ヲ入下ラク、リタル形左ノゴトシ



装束草 小笠原ハコノシ草下シヤウブ草上
武田ハコノシ草下クロ草上

小笠原流ハ本弭ノ所ヲ如此組ラニテ結ぶ武田流ニテハ
但猶ニテ結ハズシテ袋ヲ引シブキテ一ムスビ結テ置ニ但軍
陣ノ時大将ノ張ガベテ入タルヲハ馬皮ニテ結ビテ持スベ
シ云々

雑ぶ事

一ゆがけ縫まりき草ぶ事ハきき草又何にても何色無紋の
草也別の草ゆ指ヲ津々ゝも不可用之赤麻ぶ九の草ハ用之
ゆがけの指をゆの草ニし津々ゝ略義也同草ゆ ゆ

緒も茶色革なるハ暑後也

一 ゆゞけの色甲小笠の紋付る事なしハあきらめ軍陣の時ハ家の紋付る也

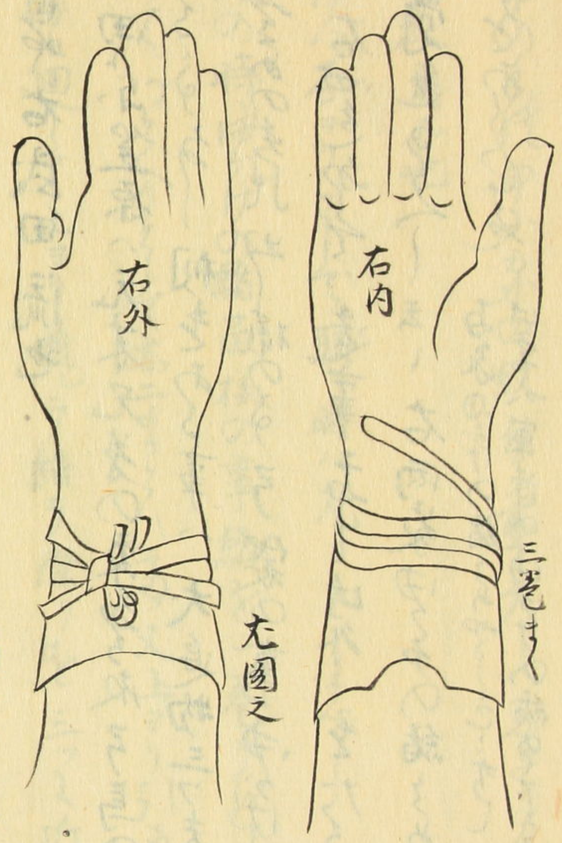
一 ゆゞけハ右より さしを取る時ハ左より とるべし

一 軍陣の時ゆゞけの緒留様の事緒を一巻き紙を上より引通し て結てゆるくして赤二まきひあり又上より引通シテ結テ手の甲の方れ廻シて上より通シテ結テ除りを三つに折りこのかしらくしし右ゆゞけハ巻初ハ右の方にまき左ゆゞけハ左の方に廻シテ巻也引通シ取くに結ふる手の甲ふるふる軍陣の時ハかきりたる事也 右小笠原流のこゝろ也

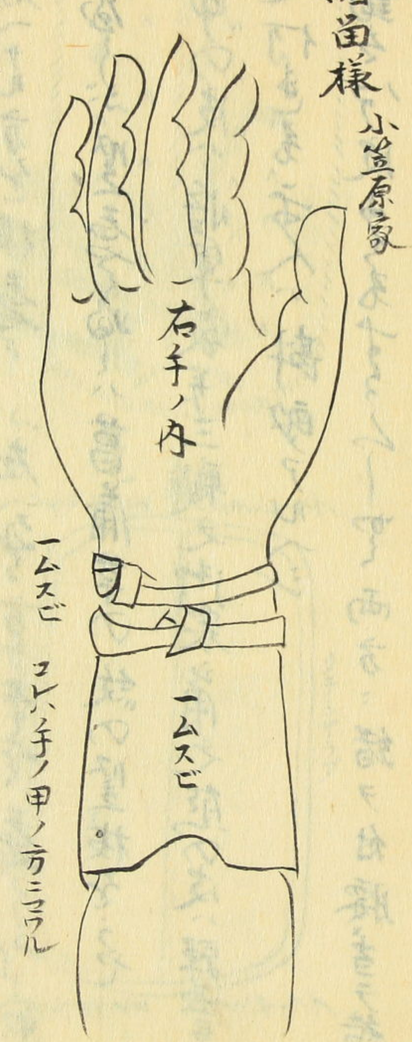
赤白緒のこゝろ三巻ゆゝひて緒のあまりを三巻上より五へ廻して却すぐ緒ゆあるを二つ小形ゆるへ折りてその折めを三巻のかしらくしの置や 右武田流也

武田ト小笠原ハ元来兄弟の家なる故弓馬の故実共家 ふるふる 相違ある事ハ 大追物三ツ矢の矢沙汰のゆ 廻ぶるめの矢ゆ出 様のる弓袋の事 ゆゞけの緒ゆ色ゆ 事右四色ゆ色ハ遠事 事 此外ゆ をたるあるハ一方 の覚悟なるべし云ゝ 右両家由ゆの緒ゆ 大ゆ繪 図をあらハす也 西泉ゆゞけの緒ゆ色ゆ 此第ハ軍陣の由ゆゞけの緒のこゝろ記ス

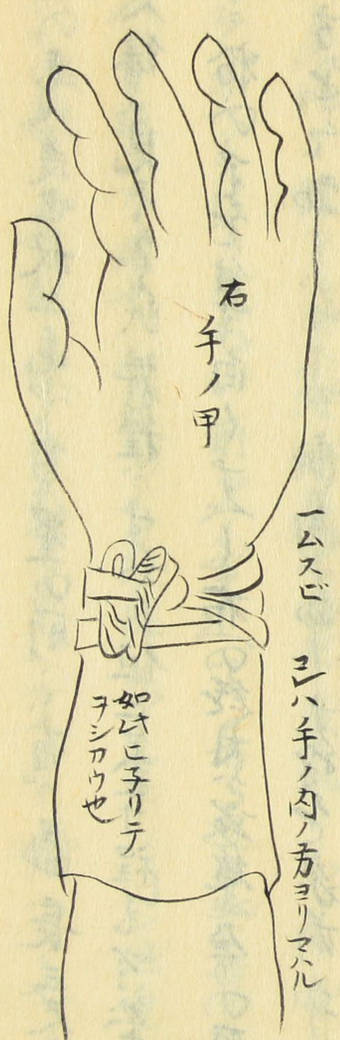
諜緒留様　氏田家



諜緒留様　小笠原家



軍陣



左諜モ是ニ准シ知ベシ

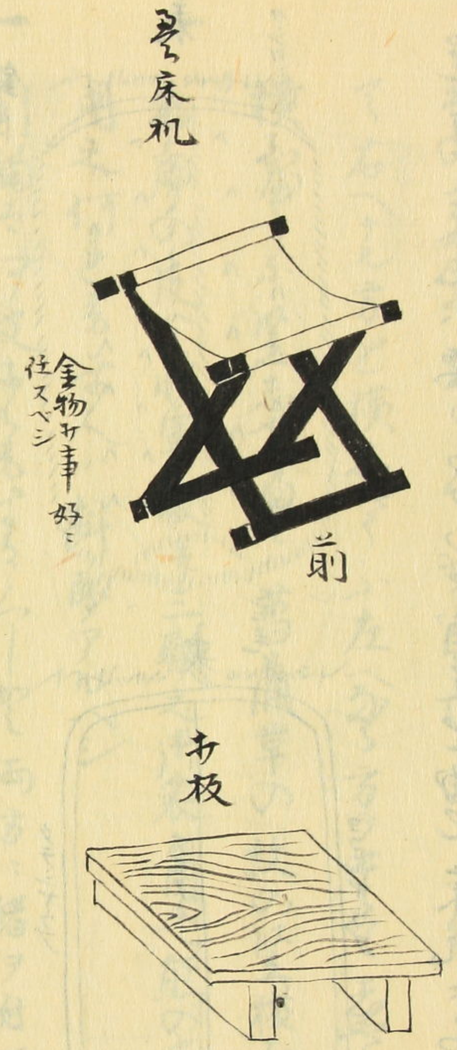
鋪皮之事

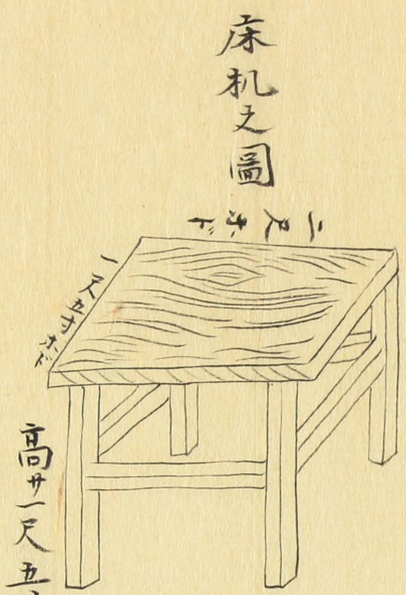
一 鋪皮の庫形皮也秋二毛ゝる星の所ゝに有ヶヨシ長三尺ヰ幅二尺餘り見ゝるゝ能程ゝすべし但二尺二寸程も不苦裏白布ゝ粉の子を付ゝ白くすべし布の経目ハ老経也ゝの聚毛の方をゝ〜〜〜〜〜〜〜〜を向ふ〜〜〜〜を表前ゝ〜〜て右へナル方を横ゝ〜〜〜〜ふ左へ〜〜〜方ヲ中ゝて〜〜〜〜〜〜〜〜

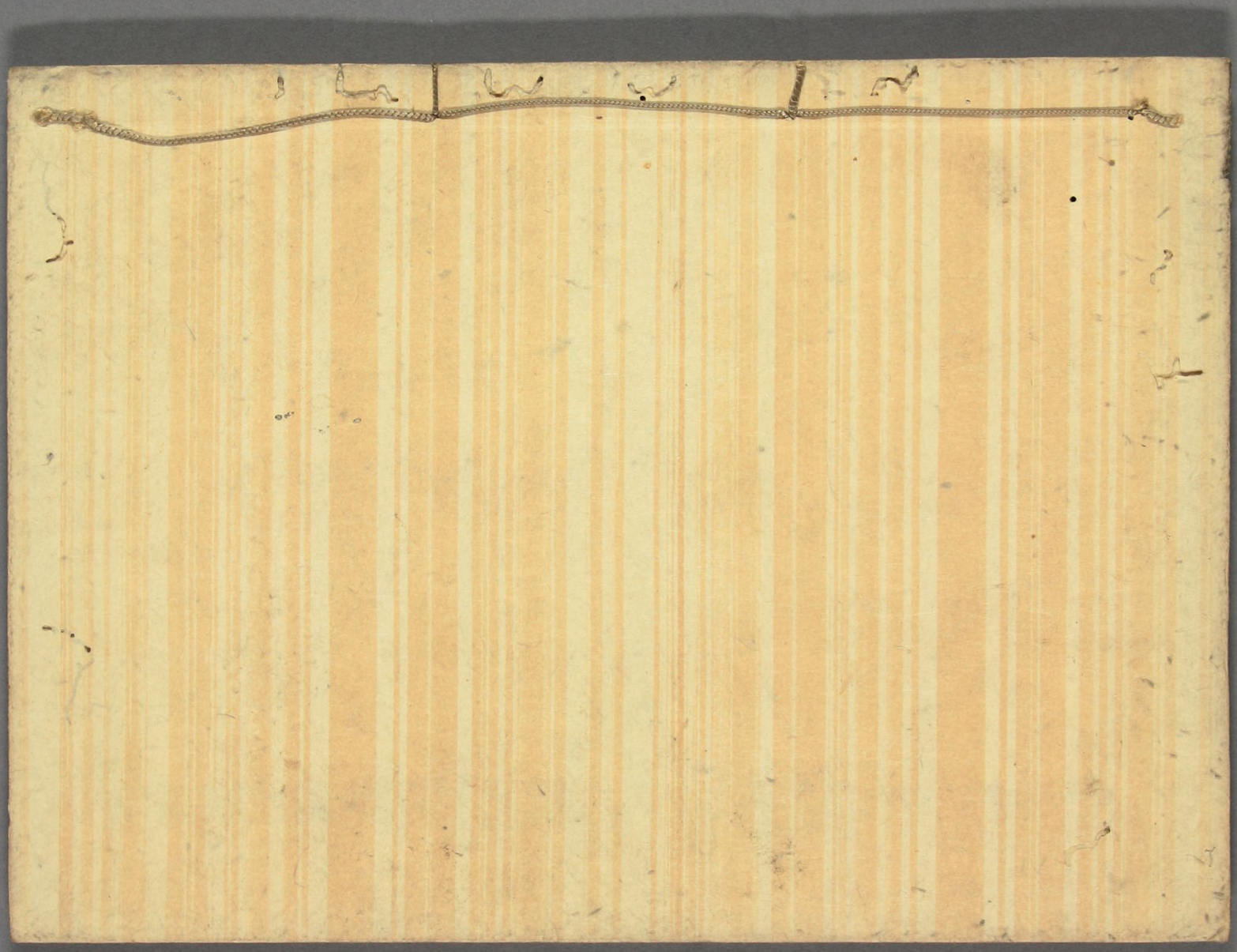
床机之事

一軍陣ゝ農床机の高サ一尺八寸也

一ヰ板之事法式あ〜鋪皮のゝ様ふしゝ裏ニ二所えんを
ヰ也高サ五寸斗あるべし





是本式之床机ハ腰ヲ掛る物ナル故床ト云ハ形ハ似タル故机ト云也カヽ木ニ作ル

甲冑を着テ甲冑を入タルかゝ槌こゝを掛るも有